



空菫夕日録

本問文庫
文庫 14
A 147
1



文庫
A147
1



明治廿八年五月六日

寺々の曉鐘響きあけの御前を此の夜あききし事は承りぬ、今日も
 とよ麗らるる日の光を照り添ひて晴れすあり物候も可なり
 や聞ふべからむ。あ、白くや、日出ぬくやと喜ぶるを先ん當人の
 語ららむ。年々歳々をむのは秋の思ひも心根もさし下
 ぬ果は癪めさるるもの、とさるるものも二三杯の酒を餅か
 腹をさし入るるをめでし、隣家ニ三軒を廻り、七軒を廻るたのむ
 たりは九時過りあり、上田氏を訪る、不在ありければ、去りて葉子
 を訪ふ、マ子子の才根も今日は元日を、盆装の市薄化粧を、笑ふ
 べきを、迎へ給ふ、愚談教訓を、あ、待て、あ、眉山の宿、名刺を授
 ぶ、松浦、井上、衣笠、江口、外山、垣内等の諸家をも、麻ひ、あ、菊池氏
 毛、利を授ぶ、福島も、酒を飲んで、大い談者、全部の刺を授ぶ、松
 永氏を訪ふ、武吉氏あり種々の昔話りも、あ、大里、午後三時

木の姿ややみ我を途の如く松栢の間に現れず、未だ雨を
被たが

松ヶ枝の末山立てり三日の晴れ

馬の川例はよめて流水流し海より風長ゆる鳴
つて行人まれば大山の山麓にうけて結ぶる原野
て飛びかく鳥の羽を重げあり。平塚もやがて越へぬ心
水の川高麗の山、例の如く巻巻を巡へて大敵の青
車空より言ふ筆の雪、雪山巖を包みて白雲半腹の集ま
る、何なる心む神々を山次のあり、詩神すめりと云はむの
おもまた此理する想ひあてはさる、あらじ。国府津の
着せしは午後三時迄空の腹甚あければ、停車場の舟も
買ひ本の浪の波の波溜るとあり長江を流し大虚
の紙風山を下る松籟を聞き、眼を上げては三浦串

島嶼幾とまの長蛇の如く波の浪大島の形は烟霞の
没して遠く水まのりるのさる荒海や枕をたたくる
川とてはあはゆる先日のあやの日の知りぬ。砂浜の
あはゆるは船あり、船がけるは縮むくらの渡夫のちらほ
よ人もあり

白波や海士の洞ほす波のりけて

船のげを産あて行厨を閉く。海風の腹を吹して海中の
すれども獣はさう四顧志は壮大の目を賞志、相顧
ては契れの白まを誘ふ、か時あつて飯屋も、菜行も一
物をいぬ。又さうして居る向を西りす元川氏家の先が
てよめば、風は外巻をおほりて、帽を奪ふとす、氏か身
を前子履き急行すれば、槍も画中の人の如くぬか。
打松、砂浜、白波、浪浪、嗚呼、これ何等の好日、平島

行脚僧の衣手さむし浦の風
此の風を破けしりく旅の人
さびしやふ聖波の美する旅の情
何おもきこみけるものや三海の音

松林は六回の我をゆへに衣を送りし遂に酒白濁の酒はけ出心
長橋を渡り塵烟も衝ひしや田原の逢せしは三時半五分は
一のさうりすし遠感や馬車は金きり先きりこせせぬ
午後五時半五分は次車はきり待たむるを不ふ
せよ〜二時の待りあるはあばあむるの病は何程
るは行くりし〜と一はあ、密柑二三個を噛んで
馬車を得て馬車の待合を過ぎて小田原の宿町もあむ
まがら橋ある山笠の家の前を過ぐ足柄海院の前より表街
へ出て西村へ烈風が塵を巻いて飛曲を打つるもあむ

初ゆく早はのりさ達す海はぬが友は世の言を聞きよ
あむわあつととをへて橋西の才へ急ぐこれよりは始終鎌倉道馬
車の音をききし佳もつり日やうやう暮れ初め冬山の景
いとくましく蕭條たり彼方にはニミの茅屋舊道の山並みは
ひとさちちあつとつは冬には水早調本に石けにひ集りし
る。寒風の怪あきし御着もよも我等が衣袖を穿する、何れの
林をくすなれの感もあつとつとくせし。友を離れて境の胡地か
洋を失る旅士の心は此何と云へば、彼もあつとつとくせし
笑ふ。疲倦かたきく昔はあつとつ痛めども勇を鼓あて進む。

行き道はせん人里素すし暮路のりふ
田の入りと敷冬山さびあ夕あつとつ

橋原を唱ぐる車二の時影をくすやうとたれたるはあむれお
二月のあはれやといへばあつとつとくせし月も車輪をのりさ

先を放り程ありぬ。

山高く月細く冬夕の夕なり。

今はやらやう湯舟も流づけばお目鼻より先臨戦境
を考て之れありは我翻るに流づけなればたを警戒を要する
ればと云々叫ばはれも興がけや打込ふ気もけり。空は
あまの早急下り今はけられぬやうにありぬ。此時の
けむる湯舟の舟子もまきの家も下りも閉ざして
淋者も早何れを山を登る。塔の海は新玉の湯
はたさるる湯舟も湯ののりも人へは其柄はなる
も舟子の湯舟も湯舟ののりも人へは其柄はなる
見れば湯舟も湯舟ののりも人へは其柄はなる
やうに湯舟も湯舟ののりも人へは其柄はなる
ものあり。湯舟も湯舟ののりも人へは其柄はなる

人々我をいへて余もまのせれあまの空を即ち西際
の二階の空ま内す
相乗りがう天候の内を教まり湯舟も流づけぬ。下
たりお目鼻より先臨戦境を考て之れありは我翻る
に流づけなればたを警戒を要するればと云々叫ば
はれも興がけや打込ふ気もけり。空はあまの早急
下り今はけられぬやうにありぬ。此時のけむる湯
舟の舟子もまきの家も下りも閉ざして淋者も早何
れを山を登る。塔の海は新玉の湯はたさるる湯舟
も湯舟ののりも人へは其柄はなるも舟子の湯舟も
湯舟ののりも人へは其柄はなる見れば湯舟も湯舟
ののりも人へは其柄はなるやうに湯舟も湯舟のの
りも人へは其柄はなるものあり。湯舟も湯舟のの
りも人へは其柄はなる

四日金曜日時

朝は八時前起り出でぬ。午代やあはし。隣りの空の空を我も

鳥鳴いて溪籟さむる久々の山。

山僧は月白う夜を何と見らる。

看誼の種。さよとびて椿サ落る。

山僧は雨の降る多日といふより。

山寺や詠の音絶て鶴の鳴く。

松樹の国も突進きて下る。秋音も前へ下る。おぼや

笑つたりする。時休遠る。神を日く。意なる。道

を道と即ち松林流をカする道を発見せたる。さう。

之は道を行く。草花心。松の根え。松が突

つり。余之れを摘んで。惜の押す。道の者は余等をせん

き。庭を草花に。世。原の休むる。か。又さす。山を。下る

坂の中。僧の逢ふ。休。能く。来。格の者。を。自ら。きて。過

ぐ。女は。陰。道。また。あ。ち。ど。削。持。神。も。持。ち。出。す。和。妹

堂の下へ入る。無用の者入る。又は。神。の。教。を。ある

た。お。て。り。鳩。停。何。も。は。ら。ん。の。神。の。教。を。ある

目。お。の。思。は。し。く。自。の。基。盤。を。結。く。る。もの。は。松

の。樹。の。ま。も。つ。あ。い。づ。か。は。一。種。の。道。を。社。の。上。に

建。て。つ。く。る。之。れ。は。入。り。ま。い。の。神。の。道。を。社。の。上

に。建。て。つ。く。る。之。れ。は。入。り。ま。い。の。神。の。道。を。社。の。上

に。建。て。つ。く。る。之。れ。は。入。り。ま。い。の。神。の。道。を。社。の。上

に。建。て。つ。く。る。之。れ。は。入。り。ま。い。の。神。の。道。を。社。の。上

に。建。て。つ。く。る。之。れ。は。入。り。ま。い。の。神。の。道。を。社。の。上

に。建。て。つ。く。る。之。れ。は。入。り。ま。い。の。神。の。道。を。社。の。上

に。建。て。つ。く。る。之。れ。は。入。り。ま。い。の。神。の。道。を。社。の。上

に。建。て。つ。く。る。之。れ。は。入。り。ま。い。の。神。の。道。を。社。の。上

に。建。て。つ。く。る。之。れ。は。入。り。ま。い。の。神。の。道。を。社。の。上

に。建。て。つ。く。る。之。れ。は。入。り。ま。い。の。神。の。道。を。社。の。上

三本山の煙の梅咲き
梅香や山路越へり旅の僧
湯存り出で何の在道を境の薄の方より出る道は清は子玄衛

心地す、看ては倉庫の時より、三時の御定を
終り、詰本を出発す、出づり、隣りの空を、千代の言を聞く
は、才、来、む、ま、ま、い、あ、れ、ど、松、平、の、馬、を、け、ら、ば、の、や、ま、り、ぬ、お、
春、の、向、ひ、は、あ、ん、身、は、お、と、り、ま、い、ち、り、の、い、ち、り、あ、ち、り、と、
ら、い、ん、と、り、の、神、た、い、し、の、我、々、を、ま、ま、お、す、ま、あ、ら、は、お、け、ら、る、四、つ、深、き、と、い、ふ、
は、た、い、し、の、見、込、も、を、ひ、ぢ、ま、い、し、と、い、ふ、即、ち、出、で、つ、松、平、の、理、物、屋
を、糸、巻、と、お、ぢ、取、も、買、ふ、暮、才、鷗、盟、故、子、行、者、有、く、何、の
の、集、ま、る、あ、ら、ま、り、た、り、た、り、の、空、を、と、り、海、山、の、空、を、
か、つ、り、宣、者、太、島、鳥、真、鶴、の、例、よ、り、も、我、を、い、ち、り、指、す、る
の、大、海、の、夜、灘、を、る、木、次、大、我、等、の、心、を、張、大、あ、り、あ、り、
る、の、ゆ、え、な、ま、た、い、ち、の、目、を、あ、り、あ、り、と、い、ふ、

波、清、蕩、鷗、群、れ、飛、ぶ、今、日、の、晴、れ、
真、鶴、や、太、島、鳥、を、け、て、白、帆、行、く、

澳、舟、の、交、り、太、海、の、浮、ぶ、本、の、ま、ま、の、い、ち、り、

眼、を、は、た、し、る、鳥、の、群、れ、を、見、よ、く、嶽、者、ぬ、ま、り、板、が
る、旨、志、を、喜、ぶ、伊、豆、の、才、の、山、焼、け、ぬ、始、め、は、社、々、と、い、ふ、
へ、志、の、は、た、は、は、る、信、者、を、夫、の、方、を、あ、り、す、定、の、の、あ、り、あ、り、
と、神、を、海、の、ぬ、全、山、の、ぬ、と、い、ふ、行、の、ぬ、と、い、ふ、成、の、は、載、り、
山、焼、け、て、海、の、面、あ、の、冬、の、景、
野、火、の、ま、り、敷、地、の、山、を、け、し、み、け、り、
空、天、も、鳥、の、ま、れ、盛、り、す、ま、じ、し、冬、の、山、
燃、も、る、大、の、花、の、ま、り、け、り、冬、の、山、
炎、山、も、ま、り、け、り、雲、を、け、ぬ、ら、む、冬、の、山、
行、く、雲、の、海、を、寫、せ、て、い、と、赤、い、の、ま、り、
冬、山、の、焼、け、り、夜、中、海、波、も、え、ぬ、
山、は、信、も、り、燈、を、ま、り、あ、り、る、が、ぬ、く、ま、り、山、は、載、は、早、い、の、ま、り、

鳥鳴時可は 後 秋 点々ともて 別々ぐ 或は 滅去 或は 栄
所 明 滅 出 現 ありの 泡 曇 たり。

冬 海 鴨 鳴 けりて 遠 大 寺 志。

遠 大 明 滅 夜 の 夢 夕 鶯 鳴 けり。

明け けりて 恨 み 顔 する 海 火 ころふ。

延 雲 霧 かり 燈 今 月 夜 げり。

照 時 湯 あり あり 志 女 轉 遠 辺 まで 四 顧 すれば
弦 月 蒼 蒼 たり たり 大海 面 うち 墨 墨 まで せし 枕

山 眠 遠 火 眠 人 ぶ 人 頼 ぶ 只 林 の 音 の 月 自 己。

月 今 宵 大 太 山 あり あり けり。

山 峯 して 弦 月 あり ね 相 根 山。

月 細 二 白 子 の 次 女 室 げり あり。

洗 湯 着 して 溝 うち あり あり 冬 の 月。

珠 今 宵 月 光 先 して 遠 火 げり。

と 一 の 鶴 や 早 洗 び けり 其 の 川。

と一のかたて 空の 鶴 けり 控 香 室 の 浴 衣 二 人 連 ね の ね 転
者 呼 ぶ 枕 あり ば 余 華 は 平 湯 衣 集 中 悪 心 甚 重 の 朗 読 始
め ぬ や けり 世 の 光 ども 熱 者 なる ぬ ぬ や 来 白 砂 まで 来りて
控 け 言 言 する 枕 自 自 己 酒 にお 厭 厭 する 春 まで あり
と 種 々の 書 傳 まで せり なる あり たり あり あり あり あり あり あり
来りぬ 花 衣 あり あり 来り あり あり あり あり あり あり あり あり
此 こそ あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり
来りぬ 中 白 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり

一日々曜日 朝亦晴天

朝は八時頃を過ぎ日先懐きたり、海晴れて青の海入り里陰の
崖より、今も晴れれば雨のやもよおすけむ大島の波はたつ
たたり、松の時のも、青の雉の鳴き声、鶺鴒の鳴き声、
群の白鳥、青の波、もて悠遊するをみる、何をか心を通
ひゆくものあり、

波 遠志 鳴のよはし 浮世のふ

海 晴れて 鶺鴒 群れ入る 破辺 二玉

波 浪 鶺鴒 やのりよ 今りの 青

鶺鴒 群 波 上を 波 ふゆらる 群 鶺鴒

浪のやもよおすけむ大島の波はたつたたり、松の時のも、
青の雉の鳴き声、鶺鴒の鳴き声、群の白鳥、青の波、もて
悠遊するをみる、何をか心を通ひゆくものあり、

社もふく 今の里 東晴の南 海は道 心を 喜を 道に 生涯
を 氣轉の 頃の 後の 悲しみの 海に 志す 此の 我れ 之を 知らば
悲しむ 人の 心 常志と する 人の 舟の 定規の 中へ 行等 是
無心の 波 浪の 波 無心の 世を 終る なる 波 浪の 鳴
呼玉 地一 葉生 波 浪の 激 あり たる 浪 浪の はげ あり
と 打たれ 竹 葉 あり たる 波 浪の 激 あり たる 浪 浪の 鳴
の 足 出 する 世を 通 する 道の 里 なる 舟 刻る 舟の ふく
きて 甚 久の 世を 通 する 道の

一 生は 鶺鴒の 似たり 藤の 人

昔を 念 懐海 人の 心 ば 美し けむ 志す 此の 我れ 之を 知らば
悲しむ 人の 心 常志と する 人の 舟の 定規の 中へ 行等 是
無心の 波 浪の 波 無心の 世を 終る なる 波 浪の 鳴
呼玉 地一 葉生 波 浪の 激 あり たる 浪 浪の はげ あり
と 打たれ 竹 葉 あり たる 波 浪の 激 あり たる 浪 浪の 鳴
の 足 出 する 世を 通 する 道の 里 なる 舟 刻る 舟の ふく
きて 甚 久の 世を 通 する 道の

網子なる女の 袖の色 夕の 光し

波海をぞし 破る 瀬まの 少女の あり。
子爵の 子の ことか ぬき せいの あり。
此書は 漢の 人 波の 上。

まはる 道原 城の 邊り 何の 五層の 上を 登る あり 波の 吹ぬ あり
く 晴れ 渡り して 波は 水の けり 波の なる あり 瀬の 船の あり
所 本 業の 如く 波を 乗り 近く は 早急の 波 遠く は 前田 大島 子
爵の 手 跡の あり 白波の 上を 登る あり 波の 吹ぬ あり
と 枝の 何れ の 波の あり なる あり なる あり なる あり
江 東の 半 身 あり なる あり なる あり なる あり なる あり
の 業は 備の あり あり 境は 静の あり あり 風は 波を 吹ぬ あり
目 画 眠る の 我の 眠る あり なる あり なる あり なる あり
然し ちて 我の 心 波の あり 只 此の あり なる あり なる あり
なる なる あり なる あり なる あり なる あり なる あり なる あり

れ 人 あり ちて なる あり 何時の 我は 我を 抜く 此の 絶佳の 絶光と
融化 せし なる あり なる あり なる あり なる あり なる あり

松ヶ枝の 大島の 隅の ちよび あり
海晴れし 城の なる あり なる あり
山背の 海 波の なる あり なる あり

波を 乗り ぬれば 五層の 群を 登り して 二子の 姿 絶佳の 絶
我の 白波の けり なる あり 昔の 波 早急の 波 遠く の 波を 吹
て 之の 城を 一層を 略取す なる あり 唯の 呼ぶ なる あり なる あり
る 英雄 必竟 草原の 波の あり 古城 なる あり 城の なる あり なる あり
の 眺を 賞志 して 此の 波の 本跡を 憐れむ もの なる あり なる あり
城 春り して 草本 春く 國 破山 何の なる あり なる あり なる あり
なる 際も なる あり なる あり 此の 如く 感ず なる あり なる あり

澗浪轉悲痛の情を刺激するの如し、感通のまはりぬ。

城崩れ○千古の青春を春の濤。

山は東海も五ヶ所古の松心。

梅咲きて古城の春を鳥の鳴く。

まじりて窓の戸辺を捕れば誰れもあるらむ。このころは木
を削ぐのみのみ聞の。さばくさるる首を捕りて首を
つたひのちを捕りて捕りて時を捕りて時を捕りて時を捕りて
は待事捕りて捕りて捕りて捕りて捕りて捕りて捕りて捕りて
まはるるも捕りて捕りて捕りて捕りて捕りて捕りて捕りて捕りて
知りぬ湯河原より。歸途のしも聞けり。即ち全車ある
て國府津の向の相模より。歸途のしも聞けり。即ち全車ある
橋も松原も瞬時のしも聞けり。國府津の向のしも聞けり。酒匂の長
事三拾分餘の時に時を捕りて捕りて捕りて捕りて捕りて捕りて捕りて捕りて

窓相を捕りて捕りて捕りて捕りて捕りて捕りて捕りて捕りて
苗原のしも聞けり。雷鳴のしも聞けり。早河のしも聞けり。あつちの山
のみ見えて何となく捕りて捕りて捕りて捕りて捕りて捕りて捕りて捕りて
情や。大波を捕りて捕りて捕りて捕りて捕りて捕りて捕りて捕りて
氏の野原を捕りて捕りて捕りて捕りて捕りて捕りて捕りて捕りて捕りて
腹のしも聞けり。本花のしも聞けり。平塚のしも聞けり。かた侍馬士の川
はまのしも聞けり。大波のしも聞けり。元たるる。やが。杉林長回の
飛びちの捕りて捕りて捕りて捕りて捕りて捕りて捕りて捕りて捕りて
車室のしも聞けり。満ちたるる。大波のしも聞けり。美首を捕りて捕りて捕りて捕りて
強どちのしも聞けり。あつちのしも聞けり。先きの程より回車せし。兵卒を捕りて捕りて捕りて捕りて
る。梅のしも聞けり。

冬の夜や病兵と煙を囲みけり。
病兵の戦詰りくや冬の夜。

拾日本曜日雨

朝聖地へ行く事例の如き東宮府へ立定り推定成願
の御書式を賜ふ事ぬ。午後三時福島氏を討つ三三の
難詰を申し歸る。晩方秋鳥を討つは永本より誂話敷
刻午後拾時迄 歸家せり

拾日金曜日雨

朝聖地へ行く。歸家(事)は廿廳に立寄り推定成願を申す
御書を賜ふ事ぬ。歸家せりはきつひの事なり。福島氏を討つ
願書を賜ふ事ぬ。之れをねせり。お上まり二枚紙も皆夫相乗
す。難詰を申し歸る。晩方秋鳥を討つは永本より誂話敷
刻午後拾時迄 歸家せり

此類する事ありし。

覚めて又夢を見る事ありし。

拾日土曜日晴

昨日午前松附湯に寝起新園を徳む。午後二時頃社骨林表
をぬ。松附湯の湯共おぼく大の湯の湯の湯とする。湯
川の湯も海湯の湯なり。無縁の湯を立寄る。お上まり
御書を賜ふ事ぬ。之れをねせり。お上まり二枚紙も皆夫相乗
す。難詰を申し歸る。晩方秋鳥を討つは永本より誂話敷
刻午後拾時迄 歸家せり

拾七

せり梅は別れをすき事もあしく就眠せり

拾三日夕曜日朝来晴

昔朝は起き事甚晩也。拾吉時名重なり我陣旅を傷けしは
は仲御氏事り佳れり。氏は直々我陣を尋らる。歸らん事多か
お文は余を告ぐるふ代りのより次第ある事なり。いよいよ
て志、今日も是を謝せり。嗚呼佳女遊不行のんす
ぞもいひのほとは思ふ。いひのほとは思ふ。いひのほとは思
ひ。いひのほとは思ふ。いひのほとは思ふ。いひのほとは思
ふ世の別なり。常は我友を奪む。いひのほとは思ふ。いひのほ
をも事なり。出まれば。いひのほとは思ふ。いひのほとは思
自然とりのさの事。いひのほとは思ふ。いひのほとは思
や女の夫の事。いひのほとは思ふ。いひのほとは思
尊の氏は甚な三時。いひのほとは思ふ。いひのほとは思

流車を歸郷の途より。いひのほとは思ふ。いひのほとは思
氏は既く此後年々。いひのほとは思ふ。いひのほとは思
婦は如何。安んず可きこの。いひのほとは思ふ。いひのほとは思
後。いひのほとは思ふ。いひのほとは思ふ。いひのほとは思
さ。いひのほとは思ふ。いひのほとは思ふ。いひのほとは思
の。いひのほとは思ふ。いひのほとは思ふ。いひのほとは思
度。いひのほとは思ふ。いひのほとは思ふ。いひのほとは思
三枚。いひのほとは思ふ。いひのほとは思ふ。いひのほとは思
分。いひのほとは思ふ。いひのほとは思ふ。いひのほとは思
惜れ。いひのほとは思ふ。いひのほとは思ふ。いひのほとは思
うは如何。いひのほとは思ふ。いひのほとは思ふ。いひのほとは思
君。いひのほとは思ふ。いひのほとは思ふ。いひのほとは思
み。いひのほとは思ふ。いひのほとは思ふ。いひのほとは思

下の宮相の子時を賜ふ。就中法城は
聖賢の御一わたりと申す。鬼の角は
れば地をぬきし御湯の。成るは
痛手あるまじし代。因縁の
は思ふ人ある。昔も知らず。され
たは此の佳言は。世も見たる者
く女をも持し。目下たたくま
異はす。果はたし。と申す。

いづらふ。いづらは佳言を知り。こ
たふ。いづらふ。いづらは佳言を知り。こ
の世の我も。いづらふ。いづらは佳言を知り。こ
の世の我も。いづらふ。いづらは佳言を知り。こ
の世の我も。いづらふ。いづらは佳言を知り。こ

いづらふ。いづらは佳言を知り。こ
たふ。いづらふ。いづらは佳言を知り。こ
の世の我も。いづらふ。いづらは佳言を知り。こ
の世の我も。いづらふ。いづらは佳言を知り。こ
の世の我も。いづらふ。いづらは佳言を知り。こ

老骨や瘦肌のつらき夜の雨。

於七日未曜の早朝の夜雨

此朝は九時の早朝に於て。於時過歸途 鐵道馬車の中を
一洋人の譯者(譯者)新國を懐き居るものあり。我は彼の無落坎の方家
の主人(主人)と云はれし人となれ。余は其の感一層深きもの
ふと思ひぬ。二時の過豊川(豊川)の新國を成らんや。ふ人せず。空
を去る。お父二郎(二郎)と三郎(三郎)の二人も。お見事(見事)を棄てて
お馬(馬)をたぐり。お右(右)をたぐりて。手紙を認む。お後(後)三時(三時)の
お三郎(三郎)を抱き。お國(國)を携へて。お三郎(三郎)は。お三郎(三郎)の
房(房)の眞實(眞實)を示す。お三郎(三郎)は。お三郎(三郎)の
素人(素人)は。お三郎(三郎)は。お三郎(三郎)の
入る(入る)お三郎(三郎)は。お三郎(三郎)の
の海城(海城)の戦報(戦報)を載す。寒気(寒気)を去く。お三郎(三郎)の

みたり。お三郎(三郎)の。晚方(晚方)社(社)が。お三郎(三郎)の
逢(逢)初源(初源)の樓上(樓上)の。お三郎(三郎)の
風(風)の。お三郎(三郎)の。お三郎(三郎)の
を(を)浮遊(浮遊)記(記)を。お三郎(三郎)の
面(面)を。お三郎(三郎)の。

夏(夏)の人の夢(夢)破(破)れけり。夜(夜)の雨(雨)。
雨(雨)音(音)ふ。夏(夏)の。夜(夜)の雨(雨)。
誰(誰)か。雨(雨)の。夜(夜)の雨(雨)。
冬(冬)雨(雨)や。人(人)の。夜(夜)の雨(雨)。
冬(冬)の日(日)や。隣(隣)の。夜(夜)の雨(雨)。
雨(雨)午(午)宵(宵)涼(涼)の。夜(夜)の雨(雨)。
誰(誰)か。雨(雨)の。夜(夜)の雨(雨)。
笠(笠)破(破)れて。冬(冬)雨(雨)未(未)だ。夜(夜)の雨(雨)。

冬の雨や水鳥の音を得物はぞ。
何より何より行くぞ雁の音。

人生一車轉燭の位か。會合必らず別離あり。別離何を必らず
合會おらむや。我室夫く悲むを己めよ。百官にすも
止めよ。天運我より巡環去まれば我も亦一個の男兒たりむのみ
馬を柳樹の影に止む。必竟これ無妻の余ま
ふへられたる特権さるる志。奮勵せよ。汝室夫く起
て獨身之の爲めか大氣焔を吐く事。文武ふる可夫。
拾八日金曜日朝来雪及雨

朝は禁地小行く。襲履泥濘。まきねく足寒り。車息も歸
家後は漂游記程の續を書く。夜拾時頃莫馬然とあて
地震起る。人々走せ出ぬれども、我は臥まくる。休ふりし。
拾九日土曜日晴

朝拾時頃藤村より江口氏大坂行小定まりたる由を語る。即ち相
伴ふて出で、若宮所なる定條氏を訪ふ。二三年位のことにして
大坂支店諸小より志出あり。事君願ぶる年寄られたるも光
あるで江口氏の姉妹のゆり、感あり。臺時の前辞未出づ。午後は
豊川を訪む少女のゆり、稀々の遊をたまふ。夜は秋骨の宿を
訪て明日一孝あの子の家を行くを約しぬ。

此日々曜日晴

朝禿本まり雑談の後相携りてへし秋骨が許に至る。午後禿
は上野へ行き、秋骨と余は一孝あの子を訪ふ。子は門口にて水を汲み
居られたり。相携りてさるるの活字。源氏の評論中々面白い
き。死といふ事か付いての議論も出でぬ。方板の日は頗る真面目か
談ぶ殆り。晚方歸途葦藁麦かこまを食ふ。宿では秋骨と語り
彼去りて別りし事もふくて秋骨をせり。

廿一日月曜日晴

午前十時過瀧起、島崎、車も早々の朝食を終り、切通坂下より車を
得て新橋へ向ふ。風寒くきて足の爪先殆んど切るゝ如く痛む。満
州の征士の苦辛はさると思ひぬ。新橋降りて江口氏の車とすれ吾等は
停車場をはるの人人をりたりぬ。午前十時氏去りぬ藤村と共待
合處の火を擁ちて少時談話の後、今所を出て袂を分つ。余は京平地へ
行きぬ。於時過赤井を初ふ秋有未だ来りなす。銀座の川山岸まで
行逢ふ。今日は中島へ行くねはありず。皇居を初め能はずといふ別
れて歸りぬ。これ歸るといふ小説の清書も取りうる。午後六時過赤
里岩渡舟を初ふ至宅。されど我輩は未だ松らぎ。秋月の伴も松
奇。か時談話を去つて赤井の目を解つへ行く。未知子病あり。夕日款
るを談話す。赤井の厚稿もまだかゝるも自まつはらずといふはこれ
歸るを是非共作せざる可きと約束ありぬ。又往の社より書翰出所

の計畫ありと聞はれり。今夕も我等三師團の共は威海衛衛を去る
於里ある山東角附近の榮城湾へ上陸せしむる時を見る。二二〇の戦車
詰をりて歸途を初めぬ。

廿二日火曜日晴

朝は雲地へなすぬ。歸る後はこのれ歸るを専ら躊躇する。晩方藤村来
ぬ五人へむす牛數冊を以附す。推の言葉を前へて合意す。相共に出で、積骨
お許を初め少時談話と鬼の外の外す時ぬ。まが難談ありし歸りぬ。

廿三日水曜日晴

此日も築地へ行くこと例の如し。歸家後は土倉のこのれ歸るを専ら
躊躇する。お文新聞を持ち来るは是れなり。若松家との外枝分を知らざるや
向ふ。碓天神社内へ入る所ありたる。今は赤井の先へ引移りたる如きと
答ふ。新聞を見居る内地震起りし。午後九時過赤井のやうく
小説・稿を脱す。辭程ぐづりた面をうのぬあるありたり。

廿四日 日本曜日 晴

此日朝築地へ行く事例の如き。先日、余等の退去を命ぜらるる遣のまは
 昨夜九時其の妻の不在の因に歸り来りて、縊死せりといふ。之を聞けば、い
 ち忘気地あるの如く、沈思すれば何とやら、少くも味は好むはれ、
 やもふ見もの、歸途、星錦氏へ、我原福を遺して、歸途を上る。家を去る、
 後、雲柑を食する、其の如く、お女去りて、大抵二時の汽車を待つ、といふ
 言、其の如く、お女去りて、といふ。今は、お女を都金とて、いへば、去る、母の
 へ行せ。涙を食ひて、有らるるが如き。善く聞けば、豊川が母を、
 歸り来りて、お女に戯るる有らる、昨夜の如くは、其の醜態を見、
 きといふ。されば、大抵へ行くと、いふ。余等は、
 ねば、一時手を明して、困らざる見ると、いふ。私は、これは、かまひ、
 らずや。お女は、嫁入り、
 母より、後手直接、此の事情を、
 一先、お女へ、

可事と云ひぬ、お女も、心を静めぬ、推の定を、
 結みけ、
 は其の母の、
 他人あり、
 は、
 此、
 は外、
 を、
 眉山、
 の、
 先、
 公、
 廿五日 金曜日 晴

昨日朝相更だ。柴地へかきぬ。家では隣家より新聞を借り
お文を持て来る。餅を煮る。青葉の画をみる。其の畫は何ぞと問
ふに、知れず。之は待つ。そのついでと云へば、不れたるも、一つらふり、
合はぬ。とある。と云ふ。新聞を讀み、傳は、昔年の評を讀み、
日記をへ送りぬ。七軒可なる。秋骨のやれを、評あり。二回ある。と
不立あり。今日は大陰。分食。多量。歎く。小児をば、思ふ。
やま。と云ふ。美園も、いひ、込みて、寝ぬ。
北の土曜。時。

朝は、秋の、むき。此の、紀の、八口、の、降。を、書。く。舊の、目。も、
は、と、難。意。解。る。を、い。ふ。午後、朝報、社、へ、送。る。餅、も、あ。る。の、評、海
を、物。せ。り。夜、か、り、た、川、を、訪。ふ。柳、村、子、あ。り。三、個、大、子、読、む。於、時、
前、野、家、す。お、孝、ま、ん、家、の、事、は、ら、れ、た、り。結婚、の、間、の、評、
を、み、す。就、眠、前、後、麻、を、書、む。泣、く。と、い、ふ、事、も、あ、る。や、う、い、ふ、と、

の、下、に、あ。る。悲、ま。雨、降、ら、せ、ば、や。梅、屋、の、社、を、い、つ、
と、い、ふ。雪、の、明。日。明、日、は、い、ふ、事、も、あ、る。眺、め、の、う、た、ま、や。隣、の、少、婦、明、日、
は、行、く、と、い、ふ。雪、の、う、た、ま、や。雨、下、は、あ、る。今、日、の、事、も、あ、る。い、ふ、
く、も、頼、子、の、事、も、あ、る。う、ら、ら、ら、と、い、ふ。雪、の、う、た、ま、や。内、の、事、も、あ、る。
我、を、い、つ、と、い、ふ。眠、の、う、た、ま、や。

昨日、朝、晴、午、後、は、曇、り、と、風、寒、志。
静、過、憶、起。秋、骨、の、宿、を、訪、ふ。時、評、話、の、傳、去、つ、て、教、會、へ、い、
聖、晩、餐、式、の、評、も、あ、る。乾燥、の、味、我、地、へ、傳、る。評、は、非、下。歸、全、
又、秋、骨、の、評、も、あ、る。湖、月、抄、を、借、り、て、家、に、送、る。評、は、於、時、の、
あり。餅、を、煮、る。評、も、あ、る。星、夜、を、い、ふ。評、も、あ、る。
午後、二、時、過、お、文、盛、装、表、東、髪、姿、を、見、て、眠、気、も、ま、り、ぬ。三、
月、の、始、頃、は、今、一、度、事、も、可、き、由、を、い、ふ。嗚、呼、彼、女、
は、遂、に、去、り、ぬ。何、と、い、ふ、悲、ま、も、あ、る。夜、も、あ、る。

秋骨が宿を訪ふ小禿本妻の居たり三個快談教
刻雨降り来る。八時過雨を衝りて歸る。源氏
の夕顔の一部を讀む

廿八日月曜日 朝未晴

昨日朝は華地へ行きぬ。午後は豊川を討ひ時談
記す。二時過出でて島崎を討ひと博物館の
裏まきを行中あり藤村より海舟伯父ある人と
同道下り東照宮へ行き清水堂を巡りてあはれ
三時過藤村と共一家の邸あり。鮎を食ふ。餅
の詰りあるを志す。五時過社骨の宿を叩き去
去て神保町の文季の社へ行き志す。秋也日あり
三個其小富士本より行くはの安守三三平凡の出来
あり。草斑の利生記先が喜ぶ。少清の岡崎に如地

の出来あり。系境車の跡あり。如。十時過歸る

廿九日月曜日

朝晩く起き出づ。別の時と題する韻文を作りし
此頃地へ難き一頁を志す。博物館に集
まりて何を成さんと。三時過まきを志す。終
れり。其後二三の漫言を志す。何れも牙へぬ者の
みせり。夜ふりて社骨の宿を志す。かき面自こし
り。歸りてはまた漫言を志す。かき面自こし
昨は今日ほどに社骨の心は抱ひたり。志す。何れも今日
はのくまを志す。我は直言を沈むる。我より。男へは怪
志す。このまきりたり。思ふまじく。如何の思へばと
ほらぬまきり。嗚呼我は老親あり。吾等
するまきり。我勤る。思ふまじく。なび

もあきつらうとをさすみて自心痛むるは。何事ぞ
運命といふてのりま配らるる我々の身。嘆
ばばと今更何とある可き。我はたの春は
さる可らふ。思はば我は好むる移気なり。さ
れば此の思も近々消去るべし。
三日水曜日朝来晴
朝は空は地は休あはば、大崎の宿起、午前の内村
舟をけらふ時侯はの舟舞家。午後二時湯家
を出でぬ道々、彼の海濱を思ふあり。層々あり
●る悲才折ちそ金あり。は彼の海山の晴やま
る眺る暫時我心の痛瘻を医志者度子。櫻れ
博物館側の松樹空を風を鳴るも何となく
彼の海辺。やうする心せられて何となく

荒

あやまらう懐の胸の燃る志も便る。や。藤
村。種々雅淡を志。午後五時湯家歸宗子
家の歸。至自ては早と時あり。志あり。む
晩は長曲を志。此は日借用のほ我者物。之は
洋信も。雁たれ。我は秋心。洋とを始る。市
松樹を志。世間後におるを環して歸る。
三日日本晴日晴
午前は築地へ行く。午後眉山を計る。不在なり。けい
二葉子を計る。五時湯家。下種。後話。けい。帳。分る。と。角
目。然と。後。けい。けい
二月一日全復る。午後雨
築地には何の如き。夕陽より。夜へ掛けて。ア。チ。イ。ド。ホ。ウ。ツ
の。断。断。を。始。む。

二日土曜日晴

朝は曇り起き出でぬ、午後も霧は甚す

三日土曜日晴風あり

於三時過社骨と共藤村の宮まで相携りて押上村
ふる野田氏を訪ふ共臥龍梅及び紅葉梅園を遊ぶ
一帯の梅の花や、綻びて芳を散らし、さるるのや

松節の多き中々旬々、筑波は甚くあて定ぬ、秋又
の諸山は近くあり、蟻近たり、夜明けの月を眺めて歸る

四日月曜日晴

昨日離談を終り清書を終り、夜に入るや、身
終る之を位るす

五日土曜日晴

晩方まで小離談の清書を終り、之前を訪ふ

晩くまで放談す

六日水曜日晴

看山を訪ふ不在、三時を以て暫時談話す、歸途
柳村を訪ふ、マールを以て中より、晩方歸る大陽
筆蹟を愛びて、之を誌す

七日木曜日晴

此日は島崎を以て、ぬ上り、式を以て、歸途社骨を訪ふ
於時迄まで終る

八日金曜日晴

去る二日の如き、怪談部の腫物出来痛み甚く、
痛といふに、吾等の世に、在りて、疼痛甚く、
絶念を以て、野太ぬ、太陽の行と、社骨松を、朝報社へ、投ず

九日土曜日晴

痛み来た去らば 大に苦む。焼芋と鮎とも夜食す
夜は就眠するを得ず

十日 曜日 晴

午前於時過外出、文藝俱樂部第一号を買ひ、送者
か立寄りの。家では自由中といへる。田力計り、ゆき佐を
見たり力あり、文藝的談話ありとある。外村氏の夜来
る大に文藝をなして去る。其れ弱を過めし腫物も
むしぬ。痛む志、夜に乃、天木、積有相伴より、果
る程の談話あり。十時過去りぬ

十一日 曜日 晴雨

此日は朝より、本をきく。雑言り、海嶺す。年夜子
のり、有る。讀書人を貸し、見れり。十二時過
去り、之を讀む。只面白くと云はむ

於二日 大曜日 晴

寢床よりある。此日 種々の書もあふ

於三日 水曜日 晴

朝はややく、海地へ行く。歸途、医者を訪じ、腫物も
潰が、とせぬ。午後、本をきく。種々の雅談をきく。
後考り、後林有、ある笑談の傳は、遂に相根談
の、行きて、笑つて相別る

於四日 木曜日 晴

朝は築地へ行く。午後は平紙を、筑前へ、死つて、書か
但、おもしろい。事、子付、あり。島崎、三、川、三、川、談笑
の、二、三、時、分、を、事、あり。と、後、林、有、相、根、談、あり。ぬ。

於五日 金曜日

朝は築地へ行く。と例の如き。家、を、は、面、談、中、あり。

譯を四頁程成しぬ、夜ふたれは別子ありふともふ
て終るぬ。秋骨討に來り。

於六日土曜りの時

於時近程先控時より西教をとり返す譯すは眞子
看病婦を抱りて來れり。一時は梅村氏來りて
の談話をまよ。ぬ四時頃相携りて池の端へ出
池を過る遠志弁天祠あり、枯木の傍りて、
洗る柳村氏神籬を引く人あり、もと無志氏は
るスパスケリアスあるも、なまきのいと云ふ上師の
梅岡の手前より、摺鉢山を越へ、商品陣列所
道の今、栗の道を北へ、博物館の傍り、車
を梅岡の森を抜けて、田が池畔より、馬の
は、今、馬の出用あり、ま、自王、ま、ま、ま、ま、ま、
無

扱上を氏より別子歸家、暖室家は西教書を扱三頁
分寫し、土曜日に就眠せり。

於七日土曜りの時

朝於時、家を出で、行くる所餘、酒け子り急ふ、
種々の雑沓、水着の、今、今、今、今、今、
ちて家の、歸る、於、於、於、於、於、
亦の來る、氏、氏、氏、氏、氏、
て本を通る、あ、あ、あ、あ、あ、
ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、
あり、あり、あり、あり、あり、あり、あり、あり、あり、あり、
キ、キ、キ、キ、キ、キ、キ、キ、キ、キ、
於、於、於、於、於、於、於、於、於、於、
於、於、於、於、於、於、於、於、於、於、

朝は筑紫地へ行きぬ。丁汝昌、劉永蟠、長文宜自殺
て劉公島を我手に置き取りとゆふ。丁等は田力さまり
に等ぶ命を捧げて部下。命を救ふ感ずるに餘あり。
十年子の如く胎腹の如くあり。志都下をむざく。移す
は人情を非た去ればを。眞傳りし。隣りし。志を頓ぶ。耳
厚あり。言を控して。彼等は。此の。一。年を出入り。自殺
す。許字子車。洋人の。想あり。提督首等。の。事。た。憐。木
む。地。た。り。と。愛。の。我。は。た。不。世。の。年。の。男。子。的。ふる。を。喜。言
ぶ。歸。家。後。は。豊。豆。川。へ。行。き。智。東。子。の。為。の。骨。神
を。弄。す。家。を。は。彩。園。城。を。請。む。晚。方。々。影。子。の。心
に。ま。り。て。雜。話。の。存。在。り。ぬ。雨。風。と。あ。り。び。て。松。屋
に。あ。る。二。日。志。干。志。但。使。次。郎。書。を。寄。り。て。身。の。上。の
不。幸。を。明。せ。ま。り。ぬ。何。れ。も。同。志。社。の。名。首。者。彼。も

亦此の勲を痛れぶやまらむ。精神の弱き由男子の
失墜せるは。此。分。を。な。ら。ぬ。もの。あり。

いねがふ、わが少女、いねまのし。

うさぎの、うさぎ

假りの、いねがふ

まのふ、たのふ、まのふ

夢をさぐ、まぼろし

常あらしぬ、闇より、闇より

頼む、たのふ、たのふ

世を、路を、光を

夢をみるよき日、涙を流し、
遣る瀬よ、夜の鐘の音よ、
暁を待て、まどろみよ、

いさぎよき心、むすぶ心、
恨多む、ちも、それ、あらふ、
朝ふ、夕ふ、我胸の、

思ふ、きざし、あはれ、
やさしき、あはれ、
手取り、あはれ、身、あはれ、

あはれ、く、
我下燃の悲、
我此の、

櫻は散りて、卯の花は、

まだ咲き出でぬ、春の暮、
古巣の谷の深山路、

このくも、あやむ、
花の、
あはれ、

あはれ、
あはれ、
過ぎ、

涼風、

夏の日影の照りそめぬ
 露いとあけき、庭もせの
 千の草もぬす衣の裾
 袂もあめす花のまきの
 のほりはあわれぬあふれぬの
 目ももるばりの美しき
 花びら摘みて
 我笑みあつてあつて
 我文柄の可たらんぞし
 胸のあけける 紅衣あそ
 夕の友と身も近く
 花枯れたれど今もあまほ
 薄紅のよと一喜のこのあいの
 花枯れたれど今もあまほ

世のうはまあるく 残るまあり。

我のこゝろ
 後ろのこゝろ

菘の花ごころの 出のこゝろをなまけて
 月いと清あや 夕ぐれのはしるはなは
 身かけりく 雲もあふく 霞もあふく
 銀の河原の岸の立ち
 星のたぎりののはこのまもあま
 我のみ胸もあけまろく
 忍ぶるあまもるまも
 穂の出し花の色ふこのく
 あこの心もやびびるけむ
 言もあまもあつていつてもあやむ
 傳へし 少女のいざらあま

乱る、胸の白糸を、この物
凍めてやみやせむ。
赤の思ひは浅くやあむ、
深くやあむ、思ひ慥に
打仰ぐ月の光は白く、
星の光り空のまらめを、
雲の行衛は二のけもふし、
見あわす面も笑ふすし。
されど、我はいつまでも、
このさき世は換はらへて、
福も消え海舟も生せらる、
はこのふき、忘れの身あり。

誠心深き一ふのさき
床のさき人の傍か、
長くは女くは子はあつは、
こねしよりの運命の御手も、
我上りな止めらねるを望む。
心くるほまき三手御もは
わの世をり
あふくも我はねるはむ、
あし止まるも我深は、
いそ我あれをためて
あふくも我はねるはむ、
あし止まるも我深は、
いそ我あれをためて

悲しき一ふのさき

あどあれはこのくちで

我はなやさしくあつたおのこ

いよあれはあどこのはこり深く

情をよくはれてはまじし

過ぎ去情の導このは

我はこのくちで

あつたおのこ

先きの日あつたおのこ

我は今日いよくら女あつた

あつたおのこ

我は今日いよくら女あつた

迷ひはわが身あつた

うらむは我胸の

あつたおのこ

別居のせめて

あれいとおれあつた

やさしくあつた

穂のあるあつた

まほ名残りあつた

一のげあつた

常々あつた

我悲しきはあつた

やる方もあらず、我思ひの
種かあはれて何時とてこの
あがの心も西路にけるも、
くらやこのげの強りもせは、
陰府に入るまじも
我恨はゆるじ。

いひまけふの悲しきも、
いひま別つらうとも、
我は百をむす
われはまげの志と勉めまはす。

あがのあがりか

我ちあがのあがりか
わが世の悲しき涙を看むは、
まがの身よりせし世にたんあがり。
我長く遠より雲井の影を仰は、
まがの行末の榮あるあがり。

まがのあがり、わがあがりか女、
見えたりもせで
行けよのし

風は江を吹きなりし袖も寒く
雲は日をも雲を雨やまらふ西やふる。

雨来る。

廿四日之晴り。朝早晴

積骨を坊主の先本あり。酒井も来る。秋花二人を伴
ふ。歸る。雑者新井。飯を御座り。二時。根津
の神泉亭。力さ。恩同の松友。臨み自身も。席
の談話を試み。又種々の話を拜聴せり。晩方積骨
の寓をやり。談話す。九時。過歸る。

廿五日月晴。朝早晴

朝築地へ行く。歸へては。西教史の翻譯をす。
寝ね。は。於。時。さ。し。

廿六日火曜日晴

朝築地へ行きぬ。家の歸り。は。西教史の
翻譯を修るす。就眠。於。時。

廿七日水曜日晴

此日朝築地へ行きぬ。翻譯。存。不。典。之。り。
中。長。平。氏。士。扱。り。し。を。し。ぬ。於。時。さ。し。西
教史の翻譯。總計二百頁。方を終る。何となく
安心。就眠。せり。

廿八日本曜日晴

朝。時。さ。し。出。で。社。有。を。訪。ふ。十二時。過。歸。家。直
下。出。で。本。御。通。へ。り。西洋。洋。里。空。計。寺。を。買。ふ。
本。本。所。の。引。取。の。本。屋。を。買。取。具。樂。部。の。編
曲。本。を。坊。通。坂。上。と。修。を。引。取。思。湯。入。る。家。を
は。文。藝。の。内。連。の。色。風。現。今。鼓。娘。山。家。水。寺。を。請。む。
鼓。娘。の。内。連。の。内。の。ガ。リ。セ。一。を。財。會。を
もの。あり。せり。晩方。積骨。来る。相。共。の。花。亭。あり。

三日の曜日朝来目曇り午後晴

午前は空より過ぎ午後には眉山に雲あり。秋の暮に
不在。柳村子に付て秋談。晩か至る。

四日卯曜の晴
午前は雨。午後には西教史を四頁譯す。夜
黒山を訪ふ不在。飄然として月を浮れ一時
歸家就眠す。

五日火曜の晴
午前は築地へ行く。午後は柳村子に来る。笑談の
後外出志大陽。常冬。早を西員求め。大なる清目の池
池を清達し。林間夕陽の然る如く。紅を見る。
家には西教史の譯を續け。又太陽を讀む。小
説は少しも面白くない。

六日水曜の朝来晴

午前雨。午後には西教史の翻譯漸く少く
はの再考を思ふ。

七日木曜の晴

朝は築地。午後は西教史の翻譯。夜は
五頁の。

八日金曜の晴

朝は築地。午後は西教史の翻譯。夜は
三六頁の。

九日土曜の雨

朝九時。秋の暮。午後には西教史の翻譯。夜は
四時頃。積有雨。付て来ぬ。語ること。時を
去る。於二時。夜は。二六頁の。

拾日 晴日 午の時に
千頭氏直はまの時松評一、倉を村に千八合あり
大原の、書に信守御守られたる御、歸るす信
二階、元本来る、高の松に信義あり、として手紙来る
信守直に、字は不し、との、御法蓮の、花
来米は博利行、と、今、ま、送、り、上、居、入、り、
秋、骨、の、御、を、付、の、米、た、る、を、あ、り、御、村、を、
訪、て、梅、子、入、る、と、い、ひ、大、突、松、淡、田、蓮、を、
す、れ、梅、の、梅、大、の、益、を、の、り、一、の、は、
二、藤、村、本、る、二、段、の、て、大、の、松、下、
拾一日 月曜日 晴
至前は早地、家のては福音の傳の社説の類
記を、一、葉、女、史、を、討、い、大、の、説、す、女、史

題ふる、息、京、軒、日、の、を、平、氏、想、を、振、の、因、す、只、獲
きて、後、の、望、如、た、り、す、一、夜、を、あ、り、て、之、の、を、
不、安、あり、す、月、の、花、の、西、海、畔、の、東、台、の、林、間、
を、あ、り、す、後、曾、取、は、む、方、あり、す、
拾二日 大曜日 晴
朝は築地、午後、谷、雜、書、所、御、持、古、き、日記、記
の、書、の、の、あ、の、を、見、る、汗、筋、を、あ、り、す、り、
は、あ、り、怒、る、や、あ、り、
西の年前より、見、た、は、余、の、一、は、佳、未、せ、る、の、
如、く、感、せ、り、夜、秋、月、を、付、ひ、控、時、過、ま、を、説
拾三日 水曜日 薄曇り
此、の、は、朝、は、築、地、へ、入、り、午、後、は、三、時、頃、より、福、島

をたふし高野氏あり四時頃まじ雑住す去りて
子まけふ大津地蔵をたふし去りて
帝國文壇に第三号を世員か帝釋日思潮の文は西宮
き旅の花葉の身歌の板あり上田力年下の
はふれ駒顔ふるかあり秋月来る九時過相撲さ
て幸御海の出で教養高野を全す
拾四日木曜日雪降る
此の朝築地へ行く雪を衝いて歸る。

雪は拂らへど袂ももろし
花は散りし衣もとまる
向ふのおどすむ野道もくす
丸るい浮世は四角も月は

拜みなりしもむい志やまのじ

あれは髪角さむ理居はおいて
ささらむのむせあれまをし
柳はみどり花くれふらふ
身も歌へば月も照る
お酒あるこのお茶めすこの
おのいお歌はあたま
さつてもこのちらお言葉も
地球の丸るいふまけ
おねいふいこの歌もあらうい。

もまいふまやんすこの

まほしき身

一夜の身

お名残惜し

妻でも情はひと

たまふや斯ふ志た

まはかする。

あれさ兄さむ何うあらわん

三昧は親く聖なる純素

物ねる。脚底も入るもの

ま

雪はと降りあきける

釋ふ子の白鳥包半

夕の醉のまださめぬ

世を目見

酒のや煙煙をさるふ

酌するわくちる玉ヨヤ

直さどさるこのさのびるは

身をもえなすれて首を垂れて落ふ

氣兼いらぶの睦言は

ほんの世動りの気さくさや

髪のはんれも口をさるやあ

根ふもむむだ投げ島田

いもほぐあそつれさる

とけてうれあいまの雪

津磨ささ入すをむく

あれさ先生堅すぎ

流の身でも柳はやまぎ、
折つて見えさうして花はある。

理屈はこのの語ではあつたよ、
いきよ調子の仄陣は、
お氣も入らぬの女のたふ、
すねたものでおちをんせぬ、
せめて一夜は玉まをまきし、
これさうするや花の影。

世も別れ既を厚霜減らうのうらみうらみの
粒を種も添へて懸をこぼれ衣と袷が蓋も
のふらぐらぐらとあらぬぞとこの心ある人

秋骨

泣くふ 秋骨 浮世は花だ
お山の百合のいちごんごの、
散るぶ凋もが あきらめきんせ、
梅も咲たまふ 柳もゆぐむ、
ナツチらむのんせ 無 梅どり。

藤村

どうせ一はは死ぬ酒酒女ふ、
ちねちん藤村えお狭い、
藤ばこのりの花のやうふ、
とよ〜 せまが小酒でも呑んで、
まりの雨もみもナラんで見やれ。

天知

目出た〜のソ若 松様や

今日の雪は雪船盤の色に
しつたまはらむ鎌倉の
さはらららららら 天知らん
松の緑のその中の子
須磨や明石のうらたのく
月よりうらたのこのうらた
忘れらん 四非ぢやぞる。

五木

ひょうたんちまははよこもあられ
偽りらららこのいらららら
五木え来一のれ本
木の知れぬとはたらあらいこの
うすな梅のさびのさく。

柳村

黄人まの辨もお人のこの
柳村先生勉強すまらる
百尺竿頭一歩を越ぬ
ミユースの神見るも好い。

酒行

古池の蛙はこりこの庵
酒宗匠の庵裡にあり
向学はこりもきこの
出でるんさうせやたの

夕景

夕の景は静小清く
澄まし給ふも

大下りや外をわんやあせ。
心れやとちよ花やさくらむ。

二葉、

おれき姉おね振すねちやア野や暮る。

一葉の秋を知りあんす。

また二葉おふるすいのぢい。

御み免々みもなやな。

梅のさのむまぼたぬ。

縁もささき片思ひぬ。

人のまはれぬ御み美み琴ことの。

笑ひ顔もあやむ。

凄あはれれもあもるあ。

せめてはまの夕ゆふぐらぬ。

散りけりささ木本の下も。
厚きたや君が胸の乱れ。

晩れり雪のうる景色さ。さし酒さけ春はる酒さけは

いさぐさいさぐさおのこいけむさ。や銀ぎん枝えだ玉たま櫛くしのて水みづ

天あま工くわのこ可かしまのた教しよ書しょのらめめ。さあさるままのあるあるあ

めでたき心こころ地ちをすれ。種たねも待まちたで消きえるあるあるあるあ

はいさく身み子こ流ながむれんたす。

拾五日金曜日日雲夜雨

朝は九時起き出心歌の訂正たうじゆ子餘しよ念ねんぶる天知藤村

一葉等へ向け部書ぶくろを定さだす。暮春ぼくしゆん方秋骨かきほねを訪たづふ

不在ふざいあり梅うめ村むら子こを訪たづふらしまさに離りれはす。

拾六日土曜日曇り雨

秋骨朝九時頃訪ひ来れり子去りて後は室内の飯
座ををさしぬ於二時頃までは何をもたさず。

○色も迷はぬ方様憎くや

色と昔のあつてのふよアハ姉抱心みや惚れぬ
朝湯のりの半てんすのぬを色艶ますあひ登。
晩方秋骨自が訪来しぬをんを食をたふ談
す夜は別々事もたそて晩れぬ

於十日明日曜二内夜見現はる

午前十時秋骨を訪ひ十時過藤村を訪ふ病
臥中移の事を話らむて四時頃秋骨の寓
まで立歸る高山氏の遊極海を評し愈ひ九時
頃歸る。さあさのの来書あり十二時頃一葉
子から死すの返書を作る

於日月曜日朝来薄曇云

此日朝はと晩く起きぬ午は日本新聞の社説
を翻記す筆流しとして也駭目なり大に懐嘆の
堪へざりし晩方文壇子界へ実積の積りまし二三の
評論をものすお安まりて三味線を引きたどて
去りぬ二時過より於時前まで日本新聞をかき記
す。

拾九日火曜日朝来薄曇云

此日は朝晩く起き出づ日本新聞の社説をかき譯す
夜は秋骨を訪ふ不坐ありければ本所小天知子を
訪ひ少時談話の傍十時前歸家す

廿日水曜日朝来晴

朝より翻記の清書のみ著す二時過天木訪来

る相携りて社骨をけい談話中藤村妻の湯屋
の晩食を喫す。梅村次いで来る。且個の談話中
面白き於時前相共の出で、廣小流の才出で本
御整髪者のほとりし。梅村子と袂を別ち歸家
廿一日本曜日朝来晴
午前より午後二時迄まじり社説の執筆を終り
一葉子をけりある。未末の梅村子とれば梅村子の
あゝ又不在あり歸途みこ一葉子をけり放談す
女史髪灰のほのれ毛をけりし。梅村子の
いへ大の現代の歌人を評志。又凄然一笑を合んで
自身の經歷を語り未末を語る。女史何の激する
所ありし。志のく沈痛悲愴ふる行路の身を投
せんとはする。余は女史の身の何の深き云ふ可
の書

らざる。秘密の潜むあるを認めし。夜は定めては報
書を渉獵す。

廿二日金曜日朝来晴

築地へ行く。十時次日本中者校の立寄り。午頃以
西氏。身の奉公の用旋を依頼す。菅虎雄氏の
と田一乃年氏の妻より由を聞きぬ。家へ歸れば甲村啓
支那行をすべしと暇乞を承りし。書を食後
直ちに淡路町の旅人宿渡の方へ行くと話す。未だ歸
る未だなる由をきく。鉄道馬車を乗りし伊勢町か
る未だ本を訪ふ不在なりければ、俵屋の宿に
の寓を訪むの時談話の傍又梅村子をけり。在宿
九時頃まで待てて歸宅す。

廿三日土曜日朝来晴

午正則十時以離床、二時過平木来る三時過相共小
出て笠輪子藤村を訪ふに不在ありければ吉原寺
を過ぎ大音寺前を通り秋骨の寓を三日づつ
か不登か憩の傍歸宅にて一パイのこあを摘獲
して就眠

廿四日 曜日 朝未晴 午後風

午前九時起き十時過教舎へ行く秋骨平木相
次いで至る、秋骨の寓ありて三時過ぎて歸家
後五時前より西宮家の新記を著す手す藤村
子来る古字、新古今、桂園一枝ギョウ詩集を
も出して大子談す民ありて又教史をかき談す。
廿五日 月曜日 朝未晴 曇り
午前は築地へ行き午後には平木の寓より大子談す

夜子ありは又一善ありの許をやりて治世談をふす

廿六日 火曜日 朝未晴

朝は築地へ行く。午後翻譯中藤村訪ひまじりぬ
相携さへて秋骨を訪ひ十時前まで談話す。

廿七日 水曜日 朝未晴

朝は築地れ例の如し、午後二時頃藤村中上田氏に
向大石彦を以て次いで来る、この事を談す。五時過
秋骨を訪ふ藤村より夕飯、酒竹相次いで来る大
子談笑す。十時前歸宅す

廿八日 木曜日 薄曇り 大風

朝築地より歸家、春陽堂及び博文館へ六時可り
西京名所并に文藝俱樂部第三編をせりふ、

は之を讀むをたまに面白くもふし。夜へのけし西教史を
少々読す。

廿九日金曜日朝来雨

午前は柔地を歩きたり午後より一時ほど雨降る
西へくたれども眠る暇も少ししてせがのたぐ
折時より金まごころふ晩方西川が根柢の
一日をを登りて福園へ赴くといふ日襟紋は盛
装さす一ふふ立派なりと思へり。夜より西教史を
八頁読めぬ御神徳は三於六頁より過ぎし我の
我根の弱きを後見せり。このころあり程は我の
西教史とも成りしる気遣はふし此の所奮勵一番
を要する所ありとむし。

三十日土曜日朝来雨

朝はいと曇りて出でぬ。ちるまを中興命達
の事書合あるよ。を清く即ち豊かしくわ
二枚とせりふ。多岐は四時ほど秋骨を
こし柳木子も訪ふ難波甚利用ひ秋骨を
みまね歸るは急ぎ急ぎと歸る道も雨
を運ぶにふふ折はあられあやむね厚
をききりしよ。而も先は雨はあやむね厚
けり秋骨をみる後には藤村もかまぬ相携
へて中央へ歩みしる。ハル氏の洋琴一
白のりしり。於晴り前歸りす。
三十一日金曜日朝来晴
午前は柔地を歩きたり午後より一時ほど雨降る
西へくたれども眠る暇も少ししてせがのたぐ
折時より金まごころふ晩方西川が根柢の
一日をを登りて福園へ赴くといふ日襟紋は盛
装さす一ふふ立派なりと思へり。夜より西教史を
八頁読めぬ御神徳は三於六頁より過ぎし我の
我根の弱きを後見せり。このころあり程は我の
西教史とも成りしる気遣はふし此の所奮勵一番
を要する所ありとむし。

其の一葉子を訪ふ中花々未く談者たり八
時頃歸家す

四月一日月曜日晴

午の頃は晩くおきき出の難談のあり掛らしき
る所志も精進をまかりし年のはしを校へ入上り
る故月まで一葉子のこいお即ち午の頃一時は師範
附属園の女子校へ行きたぬ六士の教員といふもの
随分世話のよいものも果れなり存みわん
は少々の難談をまかりぬ。

二日大晴の朝未晴

朝は定めて佐る内五本蔵をまます。身の上のるる
付きと女目目する法話をまます。捕井ふ出でく
車より丘上をまます。橋は大都をまます出でたるる

朝寝ぼけことば
ふたりの重宝
昔を懐か

さきより「歸家秘伝」法中柳村のまゝのぬぬ
藤村も亦乃いで訪へる三箇出でく秋は月が満
ちあぐ不立す。柳村も亦乃の時のはまきりも
多きは秋首の歸郷を待てる。於て歸郷の東
のぬぐうの道行を大に法中。

三日水曜日朝未曇る夜雨

午の頃より西教史の訳を取り掛り晩方まで
はりのたぎり付けぬ秋を待つ不立柳子を待つ
放談教史の春の節を衝つて歸郷せしは十時
の如く川のかた
の如く川のかた
の如く川のかた

四日本曜日朝未雨

朝は築地へ行く午後は家西教使の翻譯を
夜子不秋宵来り波南行の件付き
様々ある冗談を口吟み去りぬキーアの詩
を就眼前に讀みぬ

五日本金曜日朝来晴

午前は築地へ行き西教使の翻譯百九拾八頁
分の科金五円九拾五を要取歸家後は居沢へ
行き高鼻集を世に禮の贈物に附け人めありは
堅きりぬ菓子子の礼を付く種々の旅談をすぬ
小出珠のいふ人の話を聞けく近來の希物あり
字を顔がる家放あり一々の世の歌讀みぬこの人
あるは顔がる頼もしき心地でせらる。晩方歸家して
は明日の坐交の準備中上田敏君までぬ相集さへて

三つま音の
黒ありはれり
常夜燈のめ
この中の其構造
頗る堅固なり

東台の丘上を歩かず月は腕の支を雲間の源に
雪のぬき花を照す清興ありありの自然傳
千金とはゆるる安んやあるむむ何時まで行くも花は
片まぬやうな思ひのまゝに清水堂
の坊主よりて今は柳村子も顔くしてさや天女の祠
小詣でんとるは子然り大子然りグイナス・神の我等は
ので嘗てせざる可きと答ふ相携さへて祠内の枯木小
腰打のめて暫時日光を会する地蔵尊をむきけ小
月下のさすおさうりたる小舟のちのば水に沈みて
五のの輕糸のねたるあも見るさへ心何とやらむ
き美感も打るやうな思はるもあつて金は
柳村子の地蔵尊とはいも雅緻ある者ありや
と云へば然り彼はすまじあるるを知らぬ駐落

五人殺も盗賊も皆彼の前子犯二事一ありと答ふ
枯骨の宮内を訪ふに至柳子と袂を別して野家
せしは拾時前子やありけし明日の事を思ひて急
きて眠ふ就きぬ

四月の白土曜日朝来曇る午後晴天

花も心もれ葉より直に死なむこのふとは故人の夢
とらや、どうせ一は死あねばさくぬ母婆婆小四角
四面の御膳構、御肩のありは晩ふふのくゝある
べき御物侍なり、さうとてはお狂い御景見、美し時
は二宮はあし、朝の紅顔はよりヤタの白晝もあらず
とも浮き、秋風髪及辺の雨朝ふそなきて鳴呼我老ぬ
ふとお仰せらるゝは、あの間なる可きまさればまゝして
此のうげろふ世の春といふは言ひありて明日はふまゝ

ものふるもは9の難し 清き月美き一と花のこの常
久のものふるべき、吾等はこゝよりあるの時を以て限ある
の御事を味ふべく作られたるものあり、いふてこの此の血
の流るる身を以て永素とて来るといふ、いふ
を追ふも天の下さる此現世の事を捨て去るべし
五右衛門の月美はしと見わたるはまゝをいふ
この所を吾等の耳に、一御事一と聞かむものは
吾等の樂しきものふる可き、二吾等は西岸一ありお樂
志のふと云ふは人海といふ此の海に身を離れたるもの
信ずる事あり、吾等は何ふまで人なりと人
る以外の者は行将何の益もなむ、一醫者一と見し
もの、は一割の怒りを惜む勿れ、一樂し一と聞かむ者
をば、徒らに空視する勿れ、今や月も朧もあて花

亦亦自爾の如志、之れチ加ふる子葉の花の目覚める
はりのふる僅のまはばしはの、~~花~~花は青日々と風
の波立つるこのめはまた、~~花~~花は都の午の
今とは盛なるのみは、片田舎の瘠垣の片隅人知
ぬ山陰の珠の哀深き花の安のより、~~花~~花はやある
べき、まゝて都の紅は、~~花~~花は人の心でせよ、~~花~~花は我
人顧みずとも、~~花~~花は恨むまじ、~~花~~花は野末の夜は
いと、人の知れぬ不遇を、~~花~~花はも、~~花~~花は
我は行く可ま山高く海闊き、春日景色は、~~花~~花は
を待ら可ま、~~花~~花は昨日の我、~~花~~花は昨日の
浮のれも、~~花~~花は昨日の、~~花~~花は昨日の、~~花~~花は昨日の、
けとより、~~花~~花は昨日の、~~花~~花は昨日の、~~花~~花は昨日の、
い、~~花~~花は昨日の、~~花~~花は昨日の、~~花~~花は昨日の、

準備もや、~~花~~花は昨日の、~~花~~花は昨日の、~~花~~花は昨日の、
備は、~~花~~花は昨日の、~~花~~花は昨日の、~~花~~花は昨日の、
れ、~~花~~花は昨日の、~~花~~花は昨日の、~~花~~花は昨日の、
ち、~~花~~花は昨日の、~~花~~花は昨日の、~~花~~花は昨日の、
色の、~~花~~花は昨日の、~~花~~花は昨日の、~~花~~花は昨日の、
紙、~~花~~花は昨日の、~~花~~花は昨日の、~~花~~花は昨日の、
所、~~花~~花は昨日の、~~花~~花は昨日の、~~花~~花は昨日の、
の、~~花~~花は昨日の、~~花~~花は昨日の、~~花~~花は昨日の、
下、~~花~~花は昨日の、~~花~~花は昨日の、~~花~~花は昨日の、
し、~~花~~花は昨日の、~~花~~花は昨日の、~~花~~花は昨日の、
秋、~~花~~花は昨日の、~~花~~花は昨日の、~~花~~花は昨日の、
の、~~花~~花は昨日の、~~花~~花は昨日の、~~花~~花は昨日の、
は、~~花~~花は昨日の、~~花~~花は昨日の、~~花~~花は昨日の、

歌舞伎の席に臨み給ふ、まの今日も亦何の他
の席にがしま事あるべし、この方様は田舎の花
見をお進の申すは、餘りよ、おまの所は、
たのしみ、
池畔をたどる、曉更替まだ全く、
み草台、
のめ、
ま、
り全く、
有然、
の時、
赤き、
品川の、

soft mellow

白帆、
み、
色、
ま、
常、
の、
羽、
ま、
も、
六、
神、
り、
け、

錯綜も緑の色艶もよく四條家あたりの松葉
色ものくやと田舎のいばりのしりしりした大船より
は舞臺裏りのの車も葉り換へて斬る時の後春
の停車場の下車す笹目々各ふる暗光廬を立
わんと松原をゆけて急ぐ煙中め立てて振り返れ
ば鶴ヶ岡近侍の丘は禁よりぼろり
のぬらりんを井さく素すき青のちる甘る煙けの
動の波をわいぬぐのふむらまを静のいづ
は春の虹の面白く鳴く声はせせめもふも耳元
あふぶ空守るは心涼くもあふぶ沈むもも
ドのあふむ心難快感をも生れぬ 天知庵を
近の庵裡いとまのわらわらして人のあふむ
しよては入庵を衝きしよのあふむ

先を行きまきりたてとるなりしと門をりもわらわえん
れば常守りののるもよむ浅黄の手紙を存し時
を此あふむし何路の侍る侍るもあふむ我大喧し
天知庵は居た中と云へば他の人のあふむ
まの内のりぬすあふむとたをたを待たぬ
先生歌字とておまき先づめらしやのあふむ
と共子此方へおまきされも例の先生のあふむ
ひよりいづる別れのあふむのあふむすむやい
公床のあふむ松のあふむ桐のあふむ蓋取り除けて
中ふる一箇の仁王のあふむのあふむ
はあふむとあふむのあふむのあふむ
勿悔のあふむのあふむのあふむ
之はあふむのあふむのあふむのあふむ

手入が主人公の徳の思ひ可なり。庄先きより
 つける昔の海のはけの注のの。空けは
 もり老も朝の移しの海はたけりて報ひして輝ける日
 の光。宿屋のたのれどおぼるの二子もナ。舟の岬角
 をつくるて僅よ。野方野舟の向ひむのたすま。村等か
 子母のひ。主人公も陽気ある。若くは金も亦た積
 子説は家とは自ら。評す所たり。至る事なり。ん
 口を開きて。一も子の身の上と交る。元本のりまを
 安あ。社有。心も情れみ。藤村が現状を。大
 遺ふ。海は。は。二死んで。藤の。のる。なびて
 主客嘆然と。して。大至す。海。の。は。ま。る。松。四。日
 む。す。り。で。遠。足。の。る。も。び。ど。万。事。の。極。定
 を。主人。公。の。托。す。書。を。食。は。睡。の。ある。主人。公。の。決

よく。公。の。二。本。の。蘭。菊。の。陶。然。と。し。身。中。み。り。人
 ぬ。午。宿。ま。時。の。主人。公。七。里。を。歩。み。あ。ら。り。の。い。食
 せ。も。も。送。り。の。後。の。評。の。天。字。目。録。を。貸。申。の。お。こ
 て。長。谷。の。大。師。の。向。ひ。の。田。畔。の。の。め。を。た。ら。ぬ。な
 石。子。持。行。る。注。の。文。字。目。録。の。持。行。る。一。本。の。書
 下。ある。去。る。事。社。有。を。一。本。の。書。を。持。行。る。一。本。の。書
 ち。の。書。を。出。つ。て。獨。り。ま。う。ひ。ま。う。ひ。の。門。内。を。進。み。入。る。ま
 花。は。人。と。ま。と。ま。の。盆。の。有。様。か。て。大。佛。先。生。平。然。と。し。て
 三。た。せ。給。ふ。境。内。の。ある。人。に。は。我。腰。の。囊。を。見。て
 肝。を。叩。いたる。扱。ある。の。後。新。く。あ。て。我。面。を。見
 後。の。もの。の。る。し。後。の。小。丘。に。駐。し。上。り。し。見。下。り。せ
 ば。花。一。面。か。た。り。たる。ふ。い。の。無。骨。気。ある。佛。像。が
 の。素。然。と。し。て。之。を。ま。ま。ま。の。く。一。面。り。し。来。た。方

は右平の大山のふもとにあらはれてゐるをいふは彼方の海面
の雨霞のまじりたるうきうきな山を直白志の軒時頂上を
直白志の軒時の詩は太白の碧石山の句を
吟見下ろせば大佛のわたりまでまゐるはあれ
どさうまで登りまゐる人は人まじし近時の人の
空遠なるはたがらるる世たりし山をとりて
境を下らんとするち手をいれれば緑陰の影
きかた上を膝打りて膝時を事をもてまゐる三松の
うきの見かたのまゐりいふとよく人のうきまじし傍
の注子定りし如のよきまゐるや何なる
思ひけれどなる無れある書本はせざるは
こよひのまじりたるは思ひに
み出で赤雲の中より紅葉をまゐりし日録

の書の法陽へ何の文辞と真す、後を補る事
の中は日本文のみをいふは一二の語を
の書をなすをいふはくもありし、此の彌陀の
殿云々の文のまじりたる向の例、三松谷寺、保釈次
金首書集のまじりたるあり、世のゴッデス、マ
ある書あり、何となく御書とす、たの書あり、江嶋
道子はいくつかすみれの表は、
いふは取りて書紙の片をいふは去る、秋谷
と此の書をいふは、新の野花見、次子折の
てはたまふぬとて打出ひ、
こよひの書のまじりたるを、この書の
をも意味するは、いふは、
ね人の書をいふは、これ出たるものまじりたるは

地まで上るは元へ入る是を奥大峯
 子可みまのことが去く下向きに進む七里渡の船の
 顔ぶる面白し雨霞の影は解の山々おらん
 と江戸橋は名もなきし海軍の一丸島の如
 く波のうねり 白帆を揺り上げ揺りさるるは
 眺めこそまさず 雲が来たるをりまねは遠
 子わたりの行方かあやある 緑の色さうす
 き灰色の雨がエイルをのけたらむあなるも被交
 あやましく流り出たされたる大海原と相對あるねむ
 れるやうの人もあるぞおのあましく七るとが松の中
 十三位の少女を隣の田舎まゝに
 とおのはるか老婦の二人 昔をたどりて
 旧の習い世法をやり 故郷の人の習は昔の

停まる少女を扶けしと 之れも前橋かのうし 尤も唐ふ
 りめんの餘沈れのはあつたれども 多だんのが別よのあければ
 ありおのとあつたはのあつたれども 多だんのが別よのあければ
 と流るる何れもいづれも 熱の情をいづれも 其面をまた
 親の思をいづれも 熱の情をいづれも 其面をまた
 此の人の思をいづれも 熱の情をいづれも 其面をまた
 るまゝに思をいづれも 熱の情をいづれも 其面をまた
 島あつた岬の傍に 絶壁を刻みて穴を作る 其の中
 十位のはあつたをいづれも 二人の人を彫める 石神木の
 昔守屋のあつたり 会士子言 其の思をいづれも 其面をまた
 く志すゆふの出る 眼をひらけはあつた 亦たむれどもか
 しもろくおもものはあつた やむおく四才の足先を愛
 るに進む。 相根屋柄の諸山は一面の煙雨殿

の内は垣ある。其頂上のみに空申す現れ、其一層の
高き、其の白雲の塊、指し柵の如くも、この内なる
の如く、中位の子止まれば、これ申すは、其の土の
の形をまじりしと相違なし。大塚の如く、
の静なり。あだりの境、清らけり。あとのゆきの
の面、白く思ふぬ。其の、白く、あつちの、運、山
さも亦一志は、雨段み、龍のて、眠れるが、如し、長
物、この、山、の、或なる、山を、きり、て、西天の、白光を、さ
へ、ま、り、て、西方の、山々を、おぼ、ひ、し、梅は、は、ま、ま、り、を
拂ひて、垣を、さ、ぐる、空、を、は、り、し、へ、の、山、の、白、く、ま、ま、り、を
やすみ、座、へ、あ、じ、と、あ、る、なる、の、座、の、け、ら、ら、る、く、ち、の、ま、ま、り
空、舟を、エ、之、ら、せ、し、ま、ま、り、を、き、り、て、梅、子、の、
湖、の、あ、ち、り、よ、り、石、燈、籠、の、より、て、少、憩、す、梅、南

51
標
標の風景、漸ちる大洋のきはみ、あ、ま、り、す、時
の、あ、ま、り、の、又、山、石、の、面、を、傳、ひ、て、空、を、は、り、し、
の、山、石、壁、の、み、も、て、け、ら、れる、その、感、の、あ、ま、り、を、さ、ま、り、し、
下は山石の面、色をさる。は、り、は、り、し、空、可
き、は、山、石、の、み、も、た、大、の、面、白、く、ま、ま、り、を、さ、ま、り、し、
む、か、ま、ま、り、し、て、空、を、は、り、し、と、い、ふ、も、た、あ、の、り、を、さ、ま、り、し、
進、入、り、ぬ、何、の、通、り、の、何、の、や、ら、分、ら、ぬ、と、い、ふ、も、た、あ、の、り、を、さ、ま、り、し、
て、行、く、一、巡、ま、り、て、お、ま、り、し、と、い、ふ、も、た、あ、の、り、を、さ、ま、り、し、
た、や、と、呼、ぶ、む、も、止、め、が、数、止、り、行、き、ぬ、ぎ、の、前、夜
の、梅、子、の、影、を、思、ひ、起、り、て、然、り、并、財、天、は、り、し、た、の、
神、ま、ま、り、と、い、ふ、も、た、あ、の、り、を、さ、ま、り、し、
身を投志て、肌、け、の、守、り、と、い、ふ、の、怪、戾、陰、の、ま、ま、り、
と、い、ふ、も、た、あ、の、り、を、さ、ま、り、し、
神、の、冥、助、を、

祈りて心慮を出づ若男子道を身軽らるる
のまのせし佳み行く石燈籠の下よこ一休みたる
又石壇を突進す道沿の茶をまき体み臨へ
市茶を召せよと呼ぶと佳旧子信りてこのまよ
此の力の人気はいのまも軽薄なる見へて面白
おぼ顔比せよある進むほとんどもあきらめ
立ちづめればかしく度れぬかましく腰工合も
指し指を許し始めれば例の脳神経はのたま
ふ其ふくうらら種々の会想を白む始め彼
の西人の別業ある方のまは我思はまよるら
か笑ひこの人はこのまか比せしこのまは自ら
知らぬと鬼子用高きまを察し田舎者の足平
神する志とらん入敷まはりのままよる十三

○此の侍の進歩が子あふむが舞ま風体の娘二
比舞馬周章の松もて竹を下りてもなりはく
たりたりぬ折重志く人角はまよく後より我如
手目ま体々の香の大喝せられては彼等の驚き
も無理なぬるなり。岩を抜向いのまよ
簀目四太と鶴の中より一羽の目をとりて束の
ま下る松の下まごまをく一羽のみまよ波打ぎ
はを掃め立てり。あはれす一羽を強く揮ふと或
はあはれす代一室中はまよまよある曲線も直
き飛ぶぬぐるは見えるまよ一羽かまよまよ
る。早し西の方へ傾きまよたる。日三を仰ぎ又東
方のまた白まよの月をぬり白顔代個立ちまよ
兼てはまよまよまよまよまよまよまよまよ

今宵月の出わたりの月日又た二つぬはよはよは
何とやら母をたれ家の人宿るは不仕女らある
やうお感でせられも思ひ切らる可。推の能くある
て西村山を越へ藤澤のまへ松花村難のり
おあのお白くすまき出でくたぐれの空まのくみ
面白き。夕日は深紅の西の空をそのて屋輪
尖のぬくのやまも何丘松林の御方まは
てしらすまの深まるとまのゆるしのかんはげん
ヨウこの時人の此星あや打たれて種々の面白
用を動い出で志むすともわりやあご思ふ内
何時の影目 船もあるる二宮の山川まをまのぬ
中み入るすーと能あるの「品まのすーと」
のすーとをせしぬあふはは着るまをせを

せーの時は能はりのを今年七出で一むりの
松林のすま目あつ因南をたどり本宿る出づ
藤澤停車場の見へ如り。さらる東西行
の汽車は日十まのぬき下りたりと見良か
る可きものありははさまをどののすーと停車場
のすばりのすまをけり。時あはれり車は
三ヶ箇のり御者を黒煙を能あやして西へ
向けて去せまのり。停車場のすまの時りまを
見えるす次のは十一時発すといふ大なる電車
て、進退難がる谷まらる有る。陥り思ひま
あけ首目十一時ををんまのり。藤澤のすまのり
むのり。すまのり。藤澤のすまのり。藤澤のすまのり
のすまのり。藤澤のすまのり。藤澤のすまのり。藤澤のすまのり

陽の大妻きし 時向表板の青なり 弱るこ
 人は其業一條とすのるもや 出れり河の口
 の洞ののいりたるもの 杖子あやうきせきり
 て見れば 善吉く 七時三十分を以て 國津
 行の列車 確一のあり 快喜を産産あひし
 行くは子喜びて せむさは 羊自きて 待ての
 桐子の 腰打体の 洋板の のころるより 他
 集本めまの ちの 重き あり おでキーツ 佳士の内
 子はさみぬ 又 他 の 場も あり ちん
 少さき 目には あり 国 旗 の 袋 なる ぬりて のころ
 中みだり けきり なるも 半 旗 を 掲げ 換へ
 重中へ 入れて 準備 完く 情のしき 重きを 枕子
 志て 腰 架木 上り 横 臥す

七時めま過ぎ 志願 不 至り 礼を 尚 負り 始め まる 國
 府津迄の 切符を 取り 線路を 控ゆると 他
 プラットフォーム 立り 月光 穂の 我を 照して 井土
 の 見せ 西天子 明ら 輝けり 空を 仰ぎ あり
 きあがり 杜南の 自 鷗 波 浩蕩の 詩を 吟ず 車は
 の 列車は 早く 来り 西行の 者は あり 履 かれて
 来る 車室の 身を 投おて 窓より 田 貝 京を 望見す
 平塚 藤澤 間の 松林 我が 我を 迎へ あり ね
 茅屋 幾 棟の 列に ぐら 所 あり 子 を 抱く 火
 月 光と あり 照 合を あり 馬
 の 河 渡 渡は 只 あり みの けきり 渡
 火の 歌も 見へ 平塚も 過ぎ あり くと
 物思ふ あり ち 松林の あり 大 影 渡り 所 見 あり

天かまを透
格あらば此の
二つ大ましく
味あべし。

ては大磯も九つやぬと思つて好を見詰れば早
車は化粧場の踏切を抜かぬと大磯をほ
旅店の人々をこぼしおの湯屋を照らして出る
鼓の音がなれり。列車の動きは出ると同時に余
後の腰解きよりお南人轉の北九位の小柄の男
の余の方の顔さし付けておまは松井君の振下
やと降がると顔あれば余はあり子下りてお男
の面を監視す。警報も始めて人音はあつた。お男
おぼろよ。おまは野山の関をまきりて国府津の
停車場に着く。急ぎ飛び降りてお男は子下り
出る。鏡道馬車の敷だまあし。たろ。弱りて大
上層一里餘の夜道をせむはよ。ぬ。と。落。懸。

騎馬あたらと今更別子さま様もあはれば勇
を鼓志で進む。鞍や一匹の馬車を埋め、刀
の足はけちた。おまは果敢ては出る。や。お
おまは。燈台はつらなれ。馬あはれば。当てる。あ
し。難けれど。ま。ん。中。ま。み。入。り。ぬ。る。子。道。路
より。おまの。人。り。や。おまの。ぬ。此。れ。る。と。大。の。サ。を
あせし。ま。おま。此。を。て。此。日。は。三。な。無。の。美。を
まけり。されど。三。な。ま。は。合。差。さ。は。は。彼。の。美。を
き。天。女。の。市。加。護。の。と。難。有。の。る。可。き。け。も。る。ん
ま。の。車。中。の。と。十。田。原。の。人。の。漁。業。の。馬。車
境。高。と。揚。子。を。大。ま。盛。る。り。ま。酒。匂。の。松。林。は
上。暗。く。河。は。悠。々。流。れ。たり。私。ら。の。子。下。り
たる。春。宵。の。目。は。強。く。今。を。て。眠。ら。る。ぬ

むせり九時頃ありわ田原の着すむねのりは
急止すしと鷗盟結の至る入にすり三はよんを
互辞せりのみめて誰も障子を開くまをりし
即ち自之を掛すれまおや馬場きんが入志
つたとして皆の娘のな余の松竹梅一室は於
て音音をよびて鳴り鳴るぬ飯をばり取と
め若の羞身懸合身すお玉おまは言ひきと
あ由りいお代はけお塔澤より来りて早川
の宿入りきぬ明日は又此方へ来る可きといふ
まだ侍嫁入はせぬと云へば之川若の才も
待た居るやあむむ先日も一軒ありけれど新
りぬとおまおの娘新嫁よりして彼のお今日も集
まりて彼の下山の折りの話をするけるこの也

外を坐れば月は懸るてと空鶴江浦のたは
いとすしとこのまみちあけきと大海の波
の色いと自志の故の渾火はた程子も
と吹ふ家に入ればおまお菊の二人来りて花
合の相手をおまお十二時迄も端書をよ
秋宵の二子。双親とく死つてはむすし時
摩す。寝床もも筆を取るも去る月九日
以降の此日無の書入をよぬ筆を授けし
は一時の坂あり眠らんすれど常成る波は
只枕の下に上せ来るむむわりの思はれうらの
れまするまはますし高しありれくは
胸の思はますしなる方なまよひて心は

あ眠り悩む時よるべし
雪をも梅ひ捨てる者袂の清く我ながら
胸はのろろ夜半の猶静なるを懐く
さねど何とやいむせあらく何と云ふ胸を
くつて堪へ難く誰やい子聞き去りの日
二三と弄へる事を思ひ出して成子たる
以上五百位迄は皆を弄へるを
臥せし眠りやいむ能くもやいむ
境をたぐるる
七日の暹日朝来曇
目覚めは三時頃やもりけむ朝月の
見えと面むいとまだ少し早湯
名床のうらやいむ
あ眠り悩む時よるべし
雪をも梅ひ捨てる者袂の清く我ながら
胸はのろろ夜半の猶静なるを懐く
さねど何とやいむせあらく何と云ふ胸を
くつて堪へ難く誰やい子聞き去りの日
二三と弄へる事を思ひ出して成子たる
以上五百位迄は皆を弄へるを
臥せし眠りやいむ能くもやいむ
境をたぐるる
七日の暹日朝来曇
目覚めは三時頃やもりけむ朝月の
見えと面むいとまだ少し早湯
名床のうらやいむ

あ眠り悩む時よるべし
雪をも梅ひ捨てる者袂の清く我ながら
胸はのろろ夜半の猶静なるを懐く
さねど何とやいむせあらく何と云ふ胸を
くつて堪へ難く誰やい子聞き去りの日
二三と弄へる事を思ひ出して成子たる
以上五百位迄は皆を弄へるを
臥せし眠りやいむ能くもやいむ
境をたぐるる
七日の暹日朝来曇
目覚めは三時頃やもりけむ朝月の
見えと面むいとまだ少し早湯
名床のうらやいむ

戸を開けは此は豊後國やは甲日はいと高くとこ
出たり室はうすく鳥雲へ上道大鷲ヶ崎初嶋
あるは又伊豆の山は眠れるかかく三浦半島
房總の方をさへさざりし波上水延院たまたは
面白きあまの春の海舞系色はあつ子佳
かりと思へり金く起床せしは八時前子やあり
けむお千代は早川より歸り来れり朝嗽せん
さて下へりけはお若る言葉の空より出方へと呼ぶ
おぞ何んふくさ入り見ればお千代より顔ふる恥
らむて顔ま北月けさのちすうを外あてお早う
却座のますとも會釋せり相更ふ下幼お気なる
所まやちり見見も秋骨すば如何子おと思ふ
も甲斐あり朝食後は横お依り大海の目

を望まむ午の前拾時の頃さうけむお若るを伴
まひて大久保神社に至る尊徳社の庭前より
横松軒のさむあささる
見ゆる土手の出方を行けは時まのこののまき
あや詩の類ふる通るく可きは一りありおま
は花を折り余はすみれを痛んで七部集本の
内にはさるみぬ絶頂ふる大久保社の石置上より
見れば早川石橋より真鶴迄の長い曲浦
は松橋の枝の間のくりて景眠れるおかく
大磯の才の山々も又青くあ工影を舞せり
お若る下の壇子孫一景一一人上は登るる洗
手所の屋根の辺か磯山表へ見入城の右手お
る松の莖お三つあこの三浦の幸島彦州の青

山を連するれ、此の川の景を何子の用也り志
と心下定めて壇を下ればお前は花を携さるが
如何子のあつると問へば風ふれぬれば用もけれ
ばあや推しよといふ城を下りては助彦橋
ある山室の前へ行くにお前はよき中へ進み
了ぬ今は先子進みてありはればお前ははざき
お追ひ付きそいふ前は一人郡内の方へ行けり
庄柄病院の前を通りよ出て、鑲道馬車の線路
お追ひて板橋の方へ至るお前の宿をたよりし
彼子逢ふ本地屋敷と名乗ると葉とを問ふ
系巻は奥様へお出立の御痛くお前は只へ
と相別れて元の道へ戻る、横道へ曲りてはく
清河子は多く水車ありて米をまぐぐるあり

あむむ白く、言て世掌屋よりお清
河のまはやはらむむはれ鯉やあむむ木の根
み草生いてのぬき下みむられて遊が敷いと
有り志早川橋の方へ出で、海にまをり宿に向
ふかやばはははははとせは伊藤伯の別邸
前より草をとりみて余の後にたてられんとする
始後之を辞けむと勉めお前の入れは清河
は魚大鳥れおとそ女供の出でれぬ余も亦を
おたのしのんとする子内儀は余の背中に紋
付きなれりといふおで、始めてお前は余の背に
先きの針をゆれしとむと思ひぬ、お前は
ま捕へんとする子前はお前はお前は
り去りぬ跡より追追れば般はみ砂上を

宿の女等共
ある秋等
いそぎ
飛んで歸れば
誰もなら
おろそ
小いおめた

するを七月中道びどく打たれり
船の腰掛けし四才の
書目系をよみし風ふり
の山岸を碎けし百千の白糸をば
あぶれきは胸のすく心地せら
風よよく
お千代大なる魚を待たて
より表をけるが今も
思ひまらんとするふ
お大子弱とちるま
もありき
午後には陣一動も
を捕ふられ大に
り空よめては
夜に入りては
おぼる

まを磯山ののけりうす
手を花合を
見日月曜日春雨端
春の雨の
海の一面の
際を横切
ど力ふけ
ぬ三浦の
まあほ
ふいて小田原の
あてお千代の
あつたを
を買ひし

秋、一葉も請子へ死つゝ手書をも致す。雨申の
目赤色に詩まりの住るれば、せめては早川のすま
でも行きさへ見むと書を食後は直すみ供すま
て宿を出で砂波を横切り叢叢を分けて古寺
へ出で大久保神社へ登る。雨霧の如くふ罪を
る雨申小石垣の上の花社々白く咲き出でた
るは一葉ほのぶのありり。

春雨濛々古城の花の

城の朱の橋の欄干は雨にぬれをまきり。赤
膝下の菱畑の色はぬれて艶ます。緑のまきり
濃く茶色ある大山の姿もけみは雨を色
まれて雲の色とまぶさばのりあり。石垣の下
なる小屋樹の中へ一人憩らるゝ大洋の面を見

る雨を運る浦風小社前の松ヶ枝（春）の初
真鶴の峰、伊豆の山々を面白くすべしと
見せぬ。

春雨小大島はこくられて

真鶴のこころあり。

あの鳥は干鳥の何ぞ雨あけも。

海のはては雨に消されて漁舟のふ。

三浦のうは雨務をさして其所をたたり知らむ松
志。

三浦（結）のちもさへも見へた（春）の雨。

下りて石垣の上よりてば其岸の軒の松の花を
ろく赤く咲き出たをぞりぬる。

雨霧の雨に漁村の松のこころあり。

あの園子白きはさきの春のあめ。
蒲田（状）とてあり泉をまゐる。春の海。
雨の目景小蛙をまきくまを亡けけり。

これよりは何方へ行可きと考ふるも
ふと心な浮びは塔の輝きて相輝し梅といふ
娘は今江浦の歸りて藤屋といふ茶屋に
まといふ事あり侍。さらば魚所までは二
四里はあらず。城の雨を衝いて行く可也。
古昔は歌枕尋ねしとて陸奥のオオササキ
歌人はあり我をも今小歌枕探ぐらむ。あ
はこを四五里の道まで去れとせむや。云は
岬角のふしの磯山、日景。面白きや。別
松もあむ。衣れよる山裾をの笑へるも

いふやは志あり此の露節の輝雨のぬれて
傳の行くは面白き。いざいざとて田子まき
道下り助音三木の重衣道ま西りするも石壇の
上は極のつと白く。たまにぬれたる。所あり。上
て見れば寺の如し。神社のぬき。何とも今分らぬ。構の
宮の庭先も此あたり。もとは古本といふ可き。お
一もと所鹿まきく。さして。花は今この。盛とて見
るふる。

何の神の庭もあむ。極く。咲く。
雨深をふくむ。極く。豊ふり。春の雨。
雨細く。櫻や。のほる。今。日の。春。
早川の方へ出づ。橋上より。訪め。は。風。添。茶。箱。根。路。
の。方。子。津。ある。田。浦。の。緑。は。雨。に。ぬ。れ。て。ま。す。

深き、ト川の流の海に入るけるは白浪花の
かゝる砕けて仰の花の如し。

早河や流れのまは花の何よ。
畑中のササの花雨はぬれけり。

ササ青く菜の花は春の雨。

鈴木の納屋へ行く前朝屋といふ飯屋あ
り之れは去る廿五年の臘月秋骨を待たせ
置きたる余一人鷗盟館へ談判に行きしをも
想起せしめきり納屋はいと静し一人のあ
るもの難ければ磯辺の坐くらふ大志
る九井の柁置きたり海打のけて眺むれば
根こそぎの漁船はいと近く並び海の面は
一面より千星の如き小之の端を付ける白波

はいと白く磯際を突き砕けて石橋の崎
の方面は吹雪の如くなるものあり。

浪はくらく磯端ある春の雨。

春雨のくらく磯山本々くだけけり。

浪の磯山本々くだけけり。

此所をもたせで石橋の方へ急ぐ道は登
あり、まゝある磯の磯國府津浦の舟
ては白浪遠く磯辺をのぎりして、浪浪南
いとあまよひ見ゆ。鷗盟館の厚もをくるる志。
向ふのるるぶらぐも雨の磯の波。

浪浪園はさびしく大磯の山は只脈あり。

石橋わたりの里の子つゆに三三をうらむる
十位まを男子女打まゝありたるが早河の字

校よりの歸るるいさるべし 昔徒止かきて香
 傘を擔ぎて急ぎ足をも我と前倅もかく
 僻村なれば長き路も躑躅して子の宿の通もと
 見へたりされども猶もるる里の子里も物文字がと
 いふるをを知りもは明けかき世の重なるべし
 ちと思ふをわくみ道は 街崖の上をるるを
 小舟内波湧きこぎ 彼方のな大海廣く
 りも重なるあれり。石橋のたへ曲るんとする
 小松枝の五株さるる 眺面白きとありあり
 止めて臨むは真鶴の崎目睫の間子追ふ心抱す
 石橋の 汀松の 五株 無舞の
 岩角屈曲して 波幾重浦遠志
 打仰ぐ梢ふ山の 春の
 春のいさるし

里見さるあたりにより重なるはさきり始のぬ
 此わたりの人ほ物さびなりまは 何のの
 らむ此あなり此の路より 美たより芽を吹きよ
 うとさるる後が 芽も出でようしとて
 草も木も萌へ出づる頃をける雨
 石橋の里は戸数僅か数指をり道ざらなる
 家の号は西丘の狭間より入りて立てり
 は我をさるる志のお文の折奉りある おくらの娘さ
 志すありといふ
 春の雨は花を散らほまて
 雨あるも猶もこのめは ちとやいふべし
 益磯際をのてりく小米神の由沖は根さそ

ぎの漁場のありし見えへて漁舟いと岸辺に近
くあらぶ。網の字もきき歴々敷ふ川さ程あり
磯端も長き。磯間幅三間ほどなる山石角の
海中に突出せり。下りては見たけれど行く
手を急げば猶進み行く。米神の里も志
堅固なる塗屋のぐきも小ふれども面白き
村あり。戸敷に拾戸餘もある。道は敷
み添をつけられたり。敷拾歩の後のまよ
り根のまよりまよめ上げらるる。磯乃のまよ
青るやうな道も之れも志ばまよ止まりて
よく見かたは思ひ。たをこも志
長は体息するも面白く思ひ。益々進
む所の村本さす。其傍に根生川村下

マキヤ御料地と記るまたる所あり。以て根生
川の村のいと近きを知らぬ。行人稀なれば
数町の商人敷を見ず。あるは行くといと屋敷
り道傍の茶店もとりは空をす。炊物
らと腰柴のみ。人敷あり。ものまよある
甚深屋根の小屋あり。皮れたる足を休む
ま日雨。磯の掛茶屋も主あり。
彼方は遠く相模灘の眺れど。彼事務
は雪の白のし。スルや。磯は此わたり
於り。サリ。黒色の西洋船の帆。一艘。海
を下する。向ふの岬角の山石。海中に
て波の元にはさま。みよする。彼方は雨にお

ほろの磁削三株立てるふと聲よくまごの池
白手とやしはま

親船の帆播高き春の雨。

春雨の磯辺の山のと黒志。

漁りの舟人いよな雨。

蛸の子ははるの雨。

おもも出でく進むふ一村あり西山の間の谷峽の

如き社ふ家居指教戸さらばふり立列ひたり

此根生川村あり

春雨や根生川の磯ふ桃自志。

春の雨葦葉屋の垣ひけぶりけり。

雨さびて人寒げありけふの暮日。

ますく足をも早めて行くふ溪流のひるたるを

聞く橋あり寂まけふ之れか本せられちり家
一軒あるかよれば江浦迄の道程を問はば
やとたべければ此は何も大なる石の橋畔に
横はねるまり。

春雨おほるおけりて野中の石は家と見へけり。

野の石を家と見てけり春雨の雨。

行暮れて道問ふすべも春雨。

野中の石も家と見へけり。

哄然として獨笑ふて進む何處とよく不安心の

思まきして一野夫を捕へて江浦へは幾許の道の

あるといへば山の徒方を幾何の程ありしと

答ふたこはと嬉しきまの足もはみぬされど

未だ江浦のはききせり或茶店を草鞋を一足も

き

とめぬ 行く手は早敷のりなみと申して、ま
ます買かみさして、道をたどる。右手は茶屋あ
り、市休け、江浦と記る者あり、百か羅一番ある
進むか一町は、のり間は一人の家もふし、或は江
浦は彼の家一軒のみはあらずやと、心打安ん
ず、あが、行くか、遊子一村の家もある、子
せり、藤屋といふは、九側の一番は、れの家
り、お梅やあると、みよりのぞき、たれど、内
う、あて、見分け難き。直さま、飛び入、ま、い、何
や、む、松、まり、悪、る、け、れば、女、前、を、通、り、過、ぎ、て
半、所、は、の、り、~~村~~の、人、家、も、あ、り、ければ、又、り、き
返、り、て、藤、屋、の、妻、の、座、敷、を、借、り、度、と
云、入、み、四、道、ま、り、右、手、は、右、手、は、右、手、は、右、手、は、
藤、屋、の、妻、の、座、敷、の、縁、側、へ

六
廻、る、い、と、鄙、ひ、陰、へ、る、少、女、一、人、茶、草、集、を、持
ち、来、る、茶、屋、の、縁、側、は、大、丈、有、る、遠、眼鏡、横、を、持
た、あ、り、脚、下、は、白、浪、の、音、高、く、け、れ、ど、二、面、玉、露、
閉、ざ、り、て、海、の、面、の、日、景、色、は、見、へ、ず、彼、方、の、空、
よ、り、は、髪、垂、る、人、な、び、兵、児、帯、の、書、生、さ、ん、一、人、出
来、れ、り、主、人、も、あ、り、む、四、拾、近、き、田、力、破、れ、た、る、
文、の、半、纏、次、女、も、出、て、来、り、間、接、け、た、る、様、を、換、
拍、す、茶、を、運、ぶ、女、も、此、所、に、お、梅、と、い、ふ、娘、は、あ
ら、ず、や、と、問、へ、ば、い、と、け、ん、人、あ、る、顔、を、見、て、我、面、を、見
詰、め、た、る、後、主、の、傍、り、行、き、て、何、事、の、さ、し、や
き、ぬ、主、は、の、そ、と、我、後、へ、あ、み、ま、れ、り、我、は
す、の、ま、の、者、茶、草、集、を、て、れ、る、り、か、ま、く、陰、を、志
す、り、七、部、集、本、取、り、出、で、く、之、を、讀、む、心、を

はおまの金を取む事ある。お梅は付して何の
秘宝ももあるやあはすまのるを思ひ
まされど逢はば歸るいと又へて我に説心
の為は面自のむとの思はれて強いても
同はまの盆上のまの躰草子を尽く嘆志
終はりの茶を啜る事と数椀雨務雨や中
く深くも様側のもりこぎて夜の
曉のあたりまでいたくぬるもあるふたぐ
れも早間もあつむと思ひければ、銭入れより
白銀貨二個取り出で、幸屋へ行きて之を茶
代とてふふきせ出で、榊外は志て礼を述
ぶる拾七八のの女をれど女の人はあはれ
何となく言せはちあたるまのりて歸るに就

く。村童(まをりて)洋人れくと叫ぶより
村を離るる子彼方の一羣、か女の五人お携
さへてまゐる。もや此の内子彼の梅はあはす
やあど推測して泣くまゝ心をじめたれど
たれも似通ひしと思ふものだめやし、あはれ
あはれ心く

春雨のうらな逢はぬ恋あそ恨みあれ。
逢はば歸る恋人泣くや春の雨。
雨は首をさすまの夕や恋心一のたし。
旅人の胸のうらみやけのるのあの。
行春の恋心人子逢はぬ春の首。
恋心人の泣く夜ありけり春の雨。
のく思ひひづけて歸るをたどる。我今日の類

向は、遠路を厭はて一雨の日の涼人を云すねた
る田力の、女ふれなく、空まき出たされて、夕首春子度
れて力なく哀れげに歸り行く、情けあらず態
をまばしとすろまよれば、成る可く、情けあらず態
志重、草雨然と志て未む可き、早晩
流くありたるふ、今日の、探涼丸はまの、逢逢はぬ
と、ふ方この云へば、寧ろ成功を告げたる方あり
は何となく心座ろみ、存存き、ささすて、足本もいと軽
く、志志も失、志志もあたる、ままあま、幾幾なるのこしを
柳へむと志て、果果は、世世の方は、街街を志て
只管の急足志て行く。

思とどげぬ涼人を志はむ春の雨。
春はなく、~~涼~~涼人まねむ雨のくれ。

江戸浦や春雨の波の三日のすむ。
江戸浦や、涯涯下、雨雨勢、浪浪も、春春の雨。
海へ入る江戸浦春雨のくれて行く。
江戸浦娘を訪へる、志志の、ああめ。
浦浪の涼人の行衛門、舟舟の、ののくれ。
根生川近き、ああたりの、崖崖下水、溜溜り、草草鞋の泥
を洗い、足足袋の、けけける、行行、澄澄の、ううね、残残をも、ササ格、志志
て、新新まき、草草鞋を、身身き、換換ち。
新まき、草草鞋ある、志志、春春の、雨雨。
は、身身の、へへて、草草鞋、心心よ、志志、春春の、雨雨。
行く春や草鞋破れぬ雨のくれ。
ます、心心の、急急ぐ、夕夕の、のの、けけいと、迫迫る、まま、るる、のの、如如、志志
海の面や、うう、うう、すす、ぐぐ、ろろ、くく、見見、入入、てて、心心は、どど、志志、いい

とふく打沈むやうある。感志のせられし。

雨の音有る。春の日の海はさびしけれ。

春の雨の夕暮さびしや波の音。

海近く山道有れり。春の雨。

春の雨や日の暮有る。時の林は。

一雨サ清ら。春の日は遠く暮れぬ。

春雨の海一面さびて日は暮るる。

あふ夕雨おもゆる。春の雨。

あど浮あて道をたどる。米神の村の中をぬけて

左道を通り。道ふき崖を擇ちて本道へ出

づ。漢人歸り来るや。碛の人の聲ら

あふ高ま。

碛の船歌清く行く春也。

米神や村人のこゝろ。春の雨。

雨さくる。村人のこゝろ。

過ぎ去る春の心。田舎の今日の雨。

数所をみて。崖下を見れば。松檜数種。株並

りけ。小立てる。碛より。岩石。道。如く海中。斗

出せり。彼方の丘。辺より。通ふ。道は。ある。如く。ふれ

ども。我々の心。けり。は。下り。わく。べ。道は。ある。さ

れど。行く。時。より。歸る。は。思ひ。さ。土。心。を

今。更。な。ふ。せ。む。心。す。ま。ね。ば。爽。夕。隙。の。間。を。傳。ひ。世

生。ふる。藪。の。如。き。間。を。ま。け。て。さ。ぎ。下。る。二。尺。ば。の。り

の。さ。み。り。下。の。烟。へ。飛。ぶ。下。り。れば。何。物。の。我。肩。を。強

く。押。す。者。あり。て。殆。んど。顛。倒。せ。んと。せ。り。瞬。視。す。れば

あ。は。蜜。柑。の。檣。の。枯。れ。枝。あり。て。先。の。顔。を。さ。る。

仕合をそまゝのりひ并財天の御利益をそまゝに松の
盤根をすぢりて磯を出で、嵐散上り佳む。巨大の
磯、嵐散相重なり相連なりて、表面の凸凹頗ぶる
異様あり、眼を奉げて洋面を望まば、早草自れ
この雨の空やうしく暗くありて、狭霧霧を出で
て、幾重のうねりうねりをあて直ふく空りせ
来る大浪小浪、嵐散角の激あては、花の吹雪の
千條、白浪とありて、岩の根を洗ふ。或時は、白馬
の如く躍りて、殆んど我衣を洗ほさんと志ある時
は、松の如く舞ふて、我草鞋をひたさしめし
風を散るの飛沫は、我面を寒く、嗟嗟たる響
は、舟々たる夕空を掠めて、松籟と和す。壯觀
殆んど自身あるを忘れんと志、夕鳥悲志く鳴

いて歸途を促せども、悦を志て去り兼ねて、徘徊
顔望すれば、前面の親船は、烟る細雨のよど
み、林まゝ見えぬ。西洋好みふる、秋風、藤村まど見え
せば、女上着らゝる知るべきのケと思ふて、嵐散をこ
下る。

行く春や自波包む磯の嵐散、
雨を先か波けりけり春の岩。
春の波の嵐散動るけり雨の真春。
春の波千條の糸を山石子のくる。
雨ふくる磯か春よる波一のほる。
嵐散頭を浪浪砕け春行のしず。
春涛、嵐散を打つて雨の腕の海首なる。
雷雲建脚下。起りて雨また寒春の波。

磯辺を傳は人の思ひしこと、小磯細石我草
鞋を踏むおとよきまふ加へて、夕波やうやう高ければ
切り立てる崖下の降る白波碎々くふるふぞ、山を道
のたひきだもあま、新まぐ付けられたる道、道は道
進めは崖巖層々として連らたれるわさるる、ま
は此を越へんと、身軽あまする、人律を思ふみ出
角ひまのりて空れば、あはれや、行手は我女ま
絶へて、脚下は穀もこけりたらむが如き、絶壁あ
心ま下も引きまゝて、院の首をたどりて、漸く平
道を出づ、よるあま、好事のまじむ、時を暮らうたれば
今夕雨を衝いて、只管な家路へ行く、石橋の村
須臾もあて余を仰へ、暮れゆく春の磯雨の海
筆も画もも、世もまじ、ま、哀れる物、寂たるさ

まを心子賣あて、ま心ぐ小汀松白砂の眺、女まの
我を深りして、身は涙、子日十川の村、子幸す、磯み出
で、越えまを方を顧みれば、石橋の、小松岬、角雨、
をばちて、波の白きもまじ、ま、鳥の方は、降る雨
の色、ま、ま、い、れて、有那無耶の、前、ま、長、影、ま、た、り
陸、ま、は、後、木、の、後、の、屋、の、燈、火、ま、ま、げ、ま、り

春●雨や燈細き澳家の軒。

春雨烟の如く番屋の燈、眠けあり。

蛭の子の夜寒、ま、衣、薄、ま、ま、春、の、雨。

波打際を暫時止みて、橋のま、出、ま、る、ま、ら、ま、道、
る、ま、蛙、跳、り、あ、ま、ま、里、の、童、我、を、ま、ま、の、見、ん、て、や、
三、洋、人、の、の、の、の、異、人、や、ア、イ、ま、ま、又、ま、ま、と、我、心、子、
急ぎを橋を越す、裏路を海濱、ま、ま、の、ま、出、で、ま、
磯

左たどり子流子草鞋の泥を洗子之を洗る浪
浪関の後を通れば直ぐ鴨田館あり降る雨は
夜を守る言中燈の光いと寂きけなり。家子入れ
は人々出で向のへて何處か行き志あるのと周る
千代女さへお歸り遊ばせとて湯を取るまると周
旋日最も勤めたり。

草鞋のぬき心地よき妹が宿。

春雨洗足湯のぬるみよのる。

今日の春は雨の強は道者志けり。

雨のぬれ磯山行をまりとて天る。

部屋に入りて晚餐を待つる幾許もふく差も身と
茶碗成すも飯来る。千代女お給侍せんともおんあ
の後の座す。恥ろふとせも秋骨まれば如何なる

ど獨心の失ふ。座も得。掛へるやもりけむか女はま
そふちあて去りぬ。湯に浴志。茶を喫て安らふ内か
女等まりて花札を弄す。幼ふり戯り時を笑
て拵二時前不就着す。あめやこの雨に更けりく
夜半の鐘哀れな三つづれて。松ヶ枝の雪下り地子落
る滴りけむとく。今お月は波ふのくみ高きこの
おどろく。鳴る雷も似通いたるむ三日は枕の
元子通ひ来て。形ばりの板屋は礎よりの動るぎ
出るやうなる常へぬ。硝子の窓にさきりて外もを
見れば只臍子雨散りて右手子連らる岬角磯山は
物真まげ小。寂びたり。日ねもす降り。真夜雨の
名残りのや。今お月は渾大の影。だみ見へず。まあて
疑りの言のれもふく。限際知れぬ大浪の面は

薄^里雲の色おぼろのふく 眺むるまゝ心は只沈み沈
み 我上をも思はず 人の上をも亡心れて思ともふく
何物をも求むる如く 悠懐^ま自^らの^{こころ} 湧きまゝりて 肆
まふ 満目^に 寂^し多^くの 懐^を 呼吸^せん^とす。

浦浪 松^が 目^を 閉^りて 雨^を 更^けり 春^の 夜[。]
鐘^の 音^が 磯^に 眠^り 雨^の 夜^半。

春雨や 松^の 雨^下 鐘^を 更^けぬ。
降^り 暮^ら 去^る 波^の 音^が けぬ 雨^の 春[。]

春^の 雨^磯の 旅^宿 寂^し 心^を う^らむ。
戀^は 泣^く 旅^宿 聞^けり 春^の 雨[。]

草^枕 雨^我を 憐^れ 夜^の 春[。]
浪^の 雨^磯 雨^の 鐘[。]

破^とう^く 春^の 夜^雨 更^けり。

春^行の 人^と 巡^る 懐^自 雨^夜。

雨^小 春^く れて 恋^人 夜^旅の 草^子。

春^雨 人^ふ 昔^の 夜^宿の 雨[。]

春^雨 人^ふ 昔^の 夜^宿の 雨[。]

もらぬ 軒^端 袖^ひ けり。

やがて 身^も 疲^れ たらば 昔^の 跡^を 入^りぬ。

九^日 大^日 曜^日 天^氣 宜^し 志[。]
朝^起 出^で 七^時 過^る 昨^日 は 雨[。]
今^日 は 空^晴 れ 朝^の 磯^も 出^る
れば 波^白 く 青^山 の 昨^夜 の 波^を 打^上 げ られ
けむ 一^輪 の 緋^桃 の 花[。] 砂^も 散^れ て 鶉^も
水^の 花[。] 行^衛 の 事^も 思^ひ 出^で 何^も や^ら ぬ

難多リ懐の自らうの通りまらければ、
取上げて砂を拂ひ持ち歸りてキリツの詩集中に投じ。

波よもられ磯よ止まりけり桃のさき。

梅花一輪嵐の後の磯よ散る。

九時頃家を出て、大久保神社へ登る。眺望例

みよと佳きう。拜殿の若き女二人あり一人は袴

八位の中ありむ島田影曲の次女をほそく水色紋の平柄

を掛け、利久茶の二紋の羽織頗ぶる好風俗あり一人は袴

四五のやまむとむ糸織の袷の綿入の羽織はまじりす

をきりて回頭ありて風見舟の佳なるを賞する様あり。余

の登り行きまほしが時よきて去る。円顔の若き侍も

中々よま、蓋も此の二三日中入る内の傑作ありむ。控舟

を一周する候。拜殿の登れば、板橋の白き桃の花

散りてあり、彼の少女等の落とま行きまほや。知難
た志。

か散りて拜殿の桃の花白志。

別處の手みやめれけむ桃のけりる。

女去りて春風の花の乱れ散る。

女の捨てた花風子散りて神の宮。

まてれけ候も花ぞ島田影曲。

行く春の若花が女の影曲よほる。

か女子の羽織のほはサ格花のさあ。

か女子の捨て行く花は江うすま。

朱唇のめれま花捨てあり神の宮。

女の捨てた花は江とさる。

又飄然とまを宿子歸れば、秋風より二枚の手書書きたる

居れり。日く明日行く可ければ暫時待てよと。春は英
語あり。嗚呼彼逐子自撰を去てたるの。情笑可
くもす。又情れむりもす。何事までも。あどけす
は此人の行をある。

都より横文字の字をけり春の暮。
行春や都の人も花を惜む。

散らぬ間の花はさる春はわく。

されど明は我都の春はわく。今日あを
出と定めたるよ。之はかゝる便更悲。体むりしあ。体む
す。さる。何事をも。思ひ惜みし。新時お
り。天気もよし。春の懐も深し。我いのこは止ま
ざるべきと。兎角は許さる。午後甘句を拾
はし。あ。草鞋を穿てしまふ。水を飲む。地へ

は端書きて明日一日の暇を乞ひ。林有は電報も
あ。早朝も来可き由をいふ。追る。

花成血り電報をけて友を呼ぶ。

大久保神社の古城の浦の今は田ふれる。春の蛙の節面
白く鳴くを聞き堤塘の上横臥す。空まき。晴れて薫風
ふ。和の。我面をふ。悠々して春興湧く。此あたりの
蛙は声いとよあと思ける。珍言響く時。一時はを止め人
和く遠く去れば。遠き方より。二ッ鳴き。他は漸々。和
す。静。耳を傾ければ。自然と。身は遠く。夢幻の境。渾
じ。去らる。が。如き。感あり。

蛙の音を聞て。池塘に眠むる春の暮
人遠く蛙ふき。われあり。春の夕
城あり。蛙の音の春を惜む。

神社の石壇を登り掛茶屋の如き子腰掛せ春鳥を食
る空は名残りなく晴たり前面帯の海の面は若々とき
て、碧波の行衛は地平線のけし、遠く霞を連たり、白
帆と々とま、白鷗の飛ぶの似たり。松梢より連りたりむ如
き豆相の磯山は青々とまると長く、真鶴崎もたまれり。
初嶋は呼べば若々へは、白帆の彼方へ見へ、三宅は
浪浪の霞に没る、今もは社在を得られども、大島は指顧
の間、子腰へて、三原山頭、煙の霞の末、子腰引く社、以て騷人
の心を引く子腰とす。

春雨霞大島の上の白鷗は

みはるの山のけしあひなり。

春空晴れて大島のけし、子腰やどる。

島は霞ためて煙たち引く春の海。

浪浪や三條の霞大島を横切る。
長閑さや春の海晴れて白帆眠る。
聞く子腰、眠をささふ蛙のふ。
春の夜の寝寝、霞のささふ波の三日。
春の松、真鶴崎、眠るあり。
真帆片帆大島、沖長閑あり。
桃花一株、漁村の垣、春を呼ぶ。
春風や石橋の岩、波白る。
櫻並りて古城の春は行のんとき。
山は眠り、松の梢、春の歌あり。
青海原のささふ、果は素霞。
若々とき、松の枝の春、眠り、三浦岬。
蛭とまて、波に座あけ、春の山。

大磯磯の磯、三浦半島、安房の山、青みくくこ雨
は浸すも有邪無邪の間、長閑さう。面白きは此の
目多あり。凡この關係を捨て、掛價すし、此河の目多は頗
ぶる佳あり。

春の海甲江の嶋近く白帆眠る。

洗手所の傍に掛せお屋の外に者あり入つて座を占め、
あこ句をなすま。

浦風もたつよきと吹けやまがく。

雪は大鷲ののくくは烟は見え春の海。

海面の雨段、早子島ありのあり。

大海のまらる大鷲のまは春の志。

浪の行衛は知らず春の段。

海、面の鷗もまのいけり紙の鳥。

春の日、松の葉のまの白帆あり。

春、波米神あたり松あり。

冬、本立の松の節あり二本あり。

波のまの間にまの蛙あり。

面白甲うまは、一の春の日子

遠山まの鐘聞あり。

波のまを聞いて社、松の春の鳥。

此あたり足音の蛙あり。

春、深き松間、長江曲浦の遠きあり。

松風よよく、まは蛙あり。

水田二三垣根、桃の白きあり。

松ヶ枝、磯山遠く遠きあり。

舟、まのまの船、まのま。

春の海磯辺の山は眠りけり。
 何まよふく春は春なる風のみ。
 人まよふとしかぶく松樹の鳥情然とまよふ事ある。
 山静まよて松ヶ枝の春鳥ふこまよ。
 春の日は眠るこの松み鳥とまよる。
 お高く日陰のほり蛙おく。
 花さすぬ鳥の言さびし喜やわ。
 菜々青く菜の花黄なり麓村。
 花を手に少女さすけり波の磯。
 心ち田作も海を見る。
 春の山の風景佳なり歌よまよ。
 きのふの行を思ひ出でければ
 まりの雨にぬるもよしや花を見む。

花さす松がけりかろし磯馴松。
 東の方を眺むれば城郭近きまなり家三軒あり。
 葦葎屋根の間に白く松のさく。
 木トじれし鴛鴦のまけりあはれまよ。
 茶店の旗松門のひるがへる。
 春風酒さるるうさな旗自ま。
 人ありこりくまよる東野まなり丸野あり。鍾先五かあり。
 唐人留もすりけし島月もまよるまよる。
 浦をさるひるあへる袖の江は
 誰が園の花の次女あるらむ。
 お酒召せ花も咲たり磯の春。
 二三本磯山の松のさすけり。
 声まよて鶯鳥をよめまよは行り。

数際小春風生可せて松言し。

春はけふも出て見よ花子暁月。

あゝ花は酒賣るる家も春更段。

然鳥よのはが答へけり春の言有し。

詩自京いと我を悩まけり春の海。

此こそまろも行なう一向も出でまら下されどほんやう者

こころをくすもいづも興する共事あれば乾燥未た

る興をのま立てる次の妙なり新体詩をものなり。之れゆゑ

興を評するも一言の中なりし。

うらうら^晴春の目、古城の黒はいよごと。

石壇高くよどぬれば、幾世経ぬむ松ヶ枝ふ。

浦風ひくき言われて、見返す才は伊豆の山。

江浦の崎真鶴の、磯山遠くくさうして、

初島をのけて海軍、澳ど舟のなりまは。

秋まねども何来善む、浪々行衛は打りし。

大島のけかりい湊く、白帆は沖をむらりて。

歌徳む人は打まめ、鷗遊ぶと呼びやせむ。

又一むの松本に、越へてむいく浦をば。

国府津の渡や小瀬、大磯小磯の汀より。

片瀬の波の空をきはす、江嶋もぞて鍾舎ん。

三浦の崎の磯の早、彼方青く離るるは。

安房の山ぞと人はいふ、さうは名もあま王くまげ。

箱根の小峯の後ま高く、二子の山や射ヶ嶽。

足柄の山の敷せまり、雨降の山のうすみどり。

東の方よ位耳へたる、麓の野路のむぎの波。

其栗屋の垣の梅花、あの子目覚るる菜の花の。

黄のあつらうがたは面巾や 草折に敷きこし休らへは、
おどろの神のふるきりよこぶ 大波のきりの響く同み、
春の蛙のゆいおのまげよ 歌のれたる一うみ
心はいつと静まりて 我ももあつてまどらめは
後の社入り木う同みと 世の行ゆく花を打ちそ
惜めたるうのうぐむすの 衣のさうらもまのうふれ、
調のいと悲しきふ、 我胸ちあひみ草折いたみ、
鶯を戻りて又えれば 大海原のひろく
霞を洗ふうげ清く、 磯の山々暮れしうみ、
眠にやあけむ長閑を 歌の心の身をきりめと、
拙き節の一が小 成らぬうらみみ胸乱れ、
我や現の我をぬ 昔たるもまを耳元み、
花間をもちてすほれる 遠山寺の鐘を聞かる。

二人の男ありその一人は眼鏡を掛けたり段上より海山のほうを
見て曰く「眼鏡を掛けて見るとまじり、三つ岩だ」と他の一人は云
ふ「まじりあるはあまのいと。金笑さる、然り、眼鏡を掛しりるも
物はあまのいとく見や、故に世の目眼鏡は替物さう、恐らく
は買冠あつむと彼等哄然たり。
眼鏡越の春面かえん花の山
白帆の次々まじり面白ま又筆を取ら上げて、
白帆と笑々鷗二似たり春のまじり、
春まじり子鷗と見れば白帆一のみ
鷗群れ飛ぶと見れば渡舟の白帆のみ
蛙のまじり又まじり、まじり懐悠々たり。
眠らむう長閑のまじり子蛙のみ
花さうらう古城の清み蛙さく

春の磯腰折すりぬ酒酌まじし
 春日の日の磯こころ社壇にて女立ち
 おそらむくして女の島田の花をほる
 島田野曲の姿もの志戸春日の夕
 みたらまの水こころみまほり女あり春日の暮
 舟一艘汀に近く白帆を風は吹こ
 負積みやせし舟磯に近し春日の夕
 大島の空に雲が志出をこ 雨霞もや三條坊さるる
 大海を枝一山子一の夕一の夕
 洗場とまて果白波の暮の夕
 大島やと真鶴の夕志遠が夕夕夕
 風が志吹き出でたり 松枝僅に上下すれども遠景
 は眠れるが如く静まり 腰折成る。

浦風は三原の山みよきむむ
 大島の煙柵しき見む。
 荒海を吹送る風の列しき
 大島の夕年のけかり夕日まて
 まあるより見ゆる春日の日のくれ
 大島に帆おののぶ家路よむむむむ
 家路急ぐ漁人の小舟夕日は隠りて
 志帆いとし自志や田原の磯
 大島自志 白波磯子くがけけり
 島山遠くむむむむむむ
 家路急ぐの白帆列して松間をのりてある。

大田

白帆〜 妻の 汀子 ぐさけり。

見返す才の松園をもちて 彼才の磯近く 松の葉取ありを
の傍り 葉をよけぬ本立てり。 其園を白帆のひそこのぞいて
通るが如きさまは 拙者 松葉の園を心得る 此の歌。

花の園をのぞいて通る白帆のふ。

妻の 磯の松の白帆の志のびけり。

春の夕大鳥の影おぼろ〜。

妻の白入えと〜 眞鶴が崎 紫あをし。

此のまうも 興たすけむ 如何すれども 何れも 早目
も入るのころ 程もあければ 筆を納め 袋を有るまゝ 石段
を下り 酒白の河畔にも 至らば 今二三句は 得らるべきのふ
と 歌集あやかりしよすがを 力草すの 裏手の坂を下れば 百鳥
舌鳥の声あきりみ 聞あゆ 石あり 草中子之てり

之れは袋を下ろして

茶畑の 杉の木まゝ 百舌鳥の鳴く

椿が落ちてかやみまゝ 山路にま

春の日はおぼろ〜 花を 波のきり

静のうらゝい 茶のまゝ 眠る 蝶の 昔か

句を 案系 ちん ひとと かり けり 春の 蝶

老父耶す〜 椿の本に 倒れたる 制札を 立てり

花の本に 制札を 立てる 老父耶す

石垣のまらあふる 新首す 生かま げり 少女の 一 群 集ま げり

遊べろまゝ

て 女子の 摘菜の ありや 茶の 世や

畑中の 石よりりて 句を得たり けり 春の 暮

波を 去 漁村の くれの 桃の ぞむ

うらうらと何ともすま春の目くれぬ
蚊の我面をあつまるをうらうらければ

蚊の我面をあつまるをうらうらければ
蚊の我面をあつまるをうらうらければ

行く春や城の石垣に櫻散る

杉の木さく立す首面白くさめる下すみれ
のなれげの咲き出でたり

草鞋の踏み所すも草鞋

仰月は石垣の古むらあて、若き日の提燈の風子動き
脚下の塘は浮草の青々とたよりよして、岸近きと
る杉さく立す首面白くさめる下すみれ

のなれげの咲き出でたり
のなれげの咲き出でたり

春の夕古城の塘よりうらうら舟

行春や東段をぬきも大山云回志

東衣の方へおで、酒匂の方へ行くと志、東衣所を海りて、
急ぎしに余も、腰を覚へ一は、引返して海濱へ出
燈台近き酒匂の松林いと青みたり

松青く水信とてま日はりゆく

数拾歩のまて、渚を二二に自まつりて、船を下ろさむと
するは二里くまて、船のうらうら、妙なる袋を停り投げ
て、助けをよへんのと叫ばば、彼等、微き下、即ち舟側
を執りて押せば、難なく進めり、平といふ枕の好者を奉
けんとするは、重くまて、袋を敷ければ、砂の上をりきり、最
先を置く、言ひし余の向うて、礼をいふ者ありたり。

渚を二里くまて、船を下ろさむと

夜の波の静のよれを春の海。

又急げば磯に舟より漁夫の魚を石上子運べし鳥

賊より鯛より鰯あり青魚あり鯖あり

人々集まりて網を引く此れ或は陸に舟を上ぐるる

ゆゑにやゆゑに思へど接をよへ人も餘まりよ好る

の嫌あれば火を飲ぶる西行せし。空はかまはぬ

に老より夕雲夕陽をたぬきてあまきくややし。其君空

の色はいと艶深き此間をなばお侍も吟をたぐ志

難ころる志

まどろ、筆を拵けて雲を眺むる磯辺に

暮れあくるに真鶴くる志春の梅

鷗盟館に錦と着きしは二時頃まき

夜は雲空にふりて宵の程は月の光も見へざり
志が八時過ぐる頃よりは雲の月もの
すぶくのぞき出でたり。

雲の春の霞の満月をりけふの月

磯山の姿眺む早河の沖ををり根を

ぎ網の相問ふ漁火燃ゆるを見え

おほる夜のいざり火青い

早河の舟より火もゆるおほる月。

拾時前よりありけむ外出せんとするよお君は今

随行す。宿場の飯盛子戯るる客も街上所々見

えけられたり。

飯盛の所々三十一ヶ所月。

おぼろ夜揚屋の榎子の女の心。
 月曇りの女の顔白春の夜。
 茶屋の障子女の目の影さす月。
 あの影は釣す人の懐月。
 竹助違橋の才へ行く角をお若子分れ人城
 内へ進む榎干村をま橋の傍は蛙の声あり
 立ち止まりて耳をすままははいとど静まり
 て糸懐自ま子懐子来る。
 城の堀に蛙鳴されたる月。
 おぼろの敗橋子ま蛙を聞きぬ。
 数拾歩まちて誰の声ぞ勸誣の鉦の音のあり
 あり

勸誣の鉦の音遠去おぼろ月

おぼろ夜や誰の家ぞ
 おぼろ夜や讀誣の鉦の音のあり。
 朱の榎の傍に村の木に暗くはいてさぐ
 下の人あり余を見て誰何ぞ一時は強またれど
 茶屋の主たる如くさるを見し心を安まちたり善きり
 月ありといふまるは三味酒持てる人の道か。
 おぼろ夜や三味酒持てる人の道か。
 おぼろの榎三味の音もる茶屋の垣
 城の茶屋の風彈低しおぼろ月
 兎角志あて上に生す
 三味線子を叩く人ありおぼろ月
 神殿の方陰黒うまて人影さく神前の幣巾のは
 たくと夜風鳴るも何とさく神さびて凄おし

掛茶屋の鶴もよこ四顧すれば夜静まると
言ふれ蛙の音も松藪の御音おぼる夜は露む
心也す。

春の夜は古城さけけおぼる月

城山崩れ花白く咲けりおぼる夜や

おぼる夜は水は伝へて古城をめぐる。

おぼる夜や松風さびて蛙ぶく。

待とも月はおぼる。六月只日雲を月のおぼる所も

おぼる夜や古城の音は波の音。

おぼる夜は古城の音は波の音。

おぼる夜は古城の音は波の音。

おぼる夜は古城の音は波の音。

おぼる夜は古城の音は波の音。

おぼる夜は古城の音は波の音。

おぼる夜は古城の音は波の音。

おぼる夜は古城の音は波の音。

おぼる夜は古城の音は波の音。

おぼる夜は古城の音は波の音。

おぼる夜は古城の音は波の音。

おぼる夜は古城の音は波の音。

おぼる夜は古城の音は波の音。

おぼる夜は古城の音は波の音。

おぼる夜は古城の音は波の音。

おぼる夜は古城の音は波の音。

おぼる夜は古城の音は波の音。

おぼる夜は古城の音は波の音。

おぼる夜は古城の音は波の音。

おぼる夜は古城の音は波の音。

春の夜の枕はさはぐぬさあめのまひ。

朝は磯を散らす。部屋をこは、日録の欠を補ふ

朝は磯を散らす。部屋をこは、日録の欠を補ふ

朝は磯を散らす。部屋をこは、日録の欠を補ふ

朝は磯を散らす。部屋をこは、日録の欠を補ふ

朝は磯を散らす。部屋をこは、日録の欠を補ふ

朝は磯を散らす。部屋をこは、日録の欠を補ふ

朝は磯を散らす。部屋をこは、日録の欠を補ふ

空晴れて大嶋
はますり霞
みけり。

志時頃めりけり。秋月悄然とて不妻なる
都に。鬼の汽車でおるをこま。
汽車時向風汽車のめめ斯の如く塵くまきせし
ありといふ花合まを。時間は四時頃あれば
言ふ。歸らむとも。命を命す。秋滑月及びま頭
カ婢等まりも金を止むるものと世志英氣たる鎖磨
ある今日とまある由を。等地子郵報すりきま決す。
踏み入る。歸るを。これけり。その山
共不出て。郵便馬の英文の電報を依頼す。
城内の力を至る。郵便脚夫追いま。郵便馬を
今一なる。歸り失れよといふ。秋骨と相願子て田
舎の電信馬の。馬を。馬を。馬を。アルビングおまの。
They didn't know how to send a foreign telegram

と書きしところあり。と大分な。行けは英文は。ト
スも。人。み。五。字。以。内。真。拾。五。才。あり。といふ。其。れ。で。は。詳
り。高。く。あ。れ。は。日。本。文。子。直。ほ。す。し。城。塚。は。美。た。む。サ
れば。や。蛙。の。一。音。也。も。聞。こ。る。し。
夕。沈。キ。神。の。宮。い。と。静。あり。の。面。長。灯。漁。村。の
遠。目。草。只。眠。れる。が。如。く。見。や。草。鞋。を。ぬ。き。捨。て。る
神。殿。と。登。り。欄。干。の。倚。り。し。相。談。を。風。雨。二。合
有。餘。年。白。頭。位。の。半。生。の。恨。を。引。く。時。五。等。若。者。此。所
の。南。會。せ。は。正。身。人。を。傷。情。の。感。を。も。す。や。あ。む。む。江。顔
相。共。子。手。を。携。さ。ん。て。さ。す。若。此。の。拜。殿。も。幾。年。の。後。一。は。雨
か。打。た。ら。る。べ。け。し。や。鳴。呼。馬。く。ん。を。知。ら。ぬ。後。の。少。女。何
處。に。有。る。べ。り。と。も。彼。も。亦。自。髪。と。数。子。の。母。たる。子

非ずむば幸の多。今の後三四拾年我等幸甚けり
再會するを得べし。其時如何の有りや
更らむらむ。如何の世の有様や思ふも人の歎
業を盡さん三五年の間に信まらむ。なかり
得可き者幾人のある。嗚呼人生の頼む足ら
る者。蓋し吾人の痛恨甚へざる所あるべしと
相顧みて博然たれば浦風松林寂々と云られて
夕の光りいと絶えり。

行く春のや水の流る花を憐む。

春のゆく水沫浮る野川のふ。

女あり二人相携りてまある。その一人は北三三子あり
らむ。面立すいとす。おほめて。髪は銀本はすあり
此あたるの人は多く。志のつかり。女をさす。此女は

装類ぐる。價素あり。若らくは此旅中の傑作なりむ
とてなと相顧みて笑ふ。

行く春の風美女の髪を吹く。

春の夕美女神の庭にさる。

秘骨み少女の眞具をさす。彼大まきさる。されど余は
任監を頼むが如し。其堂は恥り。いのちのさるべし

恋人の姿強きより行く春のや。

恋を恨む。まの夕の鐘ゆし。

殿を下り。車衣の方へ出で。城壁の上を登れば。崖下子
釣り。重なる人々あり。絶え自のこゝろ通か。

堀川子釣りする人やまの首た。

足下まけり。花ねぶたげ。赤く咲き出でたり
鎌道馬車會社の万人行の人とする。自然をぬり

Whosoever thou art & whatever be thy
Stranger what Thou enterest this sanctuary
remember thou treadest upon ground hallowed
by the worship of ages.
This is the temple of Biddah & the gate of the eternal
of should therefore be entered with reverence

此處乃禮拜之所
凡欲入此門者
當懷敬畏之心
此乃永恒之門